

小田原史談

第 158 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

関東大震災

片岡永左衛門

大正十二年九月一日は早朝より別に天候も異常なく、町の人々の最早屋食をと思った十一時五十八分頃に、俄然と上下動が始まった。これは強い地震と思う間もなく、壁は崩れ、鴨居は落ち、土煙は一面に黒く揚がり、土蔵も家屋も倒潰するし、さしも堅固に築きたる小田原城の石垣も崩落し、その石と石と落ち重なる音響は天地も破壊するかと恐怖する暇もなく、只呆然と自失したる時に、第一小学校より出火し、黒煙は天に

沖し、それ火事と云う間に、代官町、青物町、其の他の数ヶ所より発火し、平和なりし町は忽ち焦熱地獄と化し、家屋の下におされて身体を失い、哀れにも救いを叫ぶもある。火勢は容赦なく猛烈に襲来し、親も子も顧みる余裕もなく、身を挺して僅かに逃れしも、或いは火傷を懼れ、家屋等に圧されたる手足を切断するをせがんで泣くもある。皆ただ恟々(びくびくする)として火に追われ濛々たる黒煙に迫られ僅かに取り出したる家財と共に避難する者は、先を争うて海岸又は緑町辺の山手に雑踏し、建物は寺院迄も倒壊したれば、宅地に畑に拘らず知るも知らぬも諸舌もなく入り込み来たり、その混雑は筆紙も及ばず。夕刻には火災は益々拡大し、竜巻を起こし大音響を発したるに、此の



片岡永左衛門 (1860~1943)

先き如何に成り行くやら

地震特集

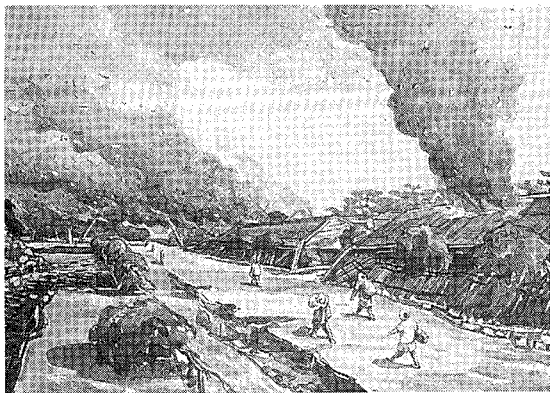
んと不安に憂慮し居たる折柄なれば、それを海嘯と誤信し、更に騒然として、陥落埋没に次ぐに亀裂を生じ、歩行も自由にならざる道路を辿りて、八幡山より谷津の方面にと、雪崩を打って疾風の如くに集まり来たりたるも、海嘯にあらざるを知り、幾分安心はなしたり。

延焼は免れたりとするも、破壊せられざる家屋は一戸も無く、余震は頻繁にして危険なれば、露地に蚊帳を張り、敷物したるは最上にて、多くは蚊帳は勿論敷物もなく、只その儘にて身も心も寛がず。電灯線は切断し、燈油、蠟燭の類いもなき暗夜なるも、火先は天に映じ、却って凄愴を極め、物食せざるも憂いに只胸は塞がり、空腹もさのみ覚えず。井戸は何れも破壊したれば止むを得ず、濁水に咽喉を潤すのみ。かくして夜も二時過ぎより、延焼は自然に火勢を失い鎮火したるも、余煙は盛んに燃えたり。

夜は明け放れて二日なり。昨日は離散し、所在の不明なりしも、今朝は尋ね当たりて安心なすもあり。圧死焼死者は夫々に葬儀に掛りたるも何れも棺の準備は出来ず、古箱又は古桶古毛布に包み昇行くもあり。平常の如く親類縁者も寄り来たらず。又は焼けたる残木を集めて宅地内に火葬したるなど悲惨を極め、昨日

迄は美服を着飾り、白粉を顔に塗りて往来したる婦人も夢の如き急轉直下に恐怖と困憊に憔悴し俄に顔には皺を生じ、黎黒(黒く)となり、知人も見迷う斗りにて、内憂は直ちに顔面に現れて薄相となり、風俗は男子も羽織など着用する者なく、破帽弊衣に細紐を帯とし、男女共に尻を端折り緩歩する者なく、平常なれば人に恥る様も普通のこととなり、却って普通に長衣するを心苦しき感ずる有様も見え、入るに家なく、止むを得ず傾きたる停車場或いは路傍に、当てもなく蹲る者も少なからず。殊に御傷わしかりしは閑院姫宮殿下の当御別邸に御避暑中震災にて薨去在らせられにて、この際なれば町民の哀悼の意を表するも得ず陸路は梗塞したれば、御迎えの駆逐艦にて御帰京遊ばされたり。

今朝より誰言うとなく、停車場に在る荷物の内食料品に限り、任意に持ち去るを許可されしとの風説に、諸方より集まり来たりて掠奪を始め、食料のみならず、貨車に在りし未配達物の物は金物、呉服、何もかも手当たり次第に持ち行くも警察署も限り有る人員にて、かつ調査は極度の奔走に疲労し如何ともなす能わず、此の際には自然と見逃したるも、後に至り警察署の推問に狼狽し、処罰を受けたる者も少なからず。当時火災に焼失したるは、中宿の途中より以東万町中程迄、南は代官町より東に万町裏の中程迄と、



小暮次郎画

第一小学校理科室辺りから出火

青物町より大工町にて、火は左右となり、右は新道に延焼し左は竹の花の中大新馬場の入口迄焼き払い、おおよそ町中の四分の三にも及び、山角町、筋違橋、欄干橋、中宿の程より西と茶畑、西海子、御花畑、新久、早川口、天神下、瓦長屋、幸田、弁才天、停車場附近、竹の花の中新馬場入口より北の方、七枚橋、大新馬場、中新馬場付近を残したり。

二日も暮れて三日の朝になりしに、流言蜚語が人々の口より耳と伝わり、平常なれば何れ馬鹿々々しいと一笑に付し去ったでもあろうが、如何にせん人心不安の真最中なれば、まさかとは思ひながらも恐怖を始めたるは、横浜監獄を開放せられたる囚人と朝鮮人が社会主義者と合同し、掠

奪と殺害に襲来することにて、午後は又風聞が一層となり、各区は俄に自警団を組織し、竹槍を作り銃器棍棒も持ち出し、要所々々を警戒し、夜に入つては、通行人を物色し、国府津まで来たの、停車場附近にて怪しき者を見掛けたのと、それよりそれへと訛伝したれば婦女子など人心もなく、辛く一夜を過ごしたるか、翌日にはすべて誤りなりしとの判明したり。

三四日の頃よりは、如何に物資に欠乏なるも、何とか雨露の凌に取り掛かりたるが、地所を持たざる者は、学校その他の焼け跡や、城掘端の比較的道幅広き路傍に、焼け残りたる亜鉛板、細丸太、竹類にて小屋を掛け、堀端は仮小屋にて飲食物を真先に売り初めれば、夜中も通行人多く、俄に飲食町を出現し、昼間は日用品の露店を出すもあり。

この頃よりは京浜の被害者が、汽車不通の故に箱根を越えて帰国する通行が次第に多く、何れも気の毒の様にて、重そうに行李や風呂敷包みを意気地もなく背負い野宿を重ね、疲労したる足の重げなるも泣く子を騙しながら手を引き行くなどは、維新後に、徳川宗家が静岡に移封となり、その藩士は昨日迄の東京住居に引き換え家族と共に馴れぬ徒歩の箱根越えの悲惨たる。あるいは足手纏いの幼児を道中に出てもし貰う人あらばと問い尋ね、この宿にても貰い

応否は兎も角かく有る事に同情するの暇もなき迄に、心も動作も緊張し空腹に食物を求めんとするも売る家なく、持ち来たりたる自転車は山越えに困り果て板橋辺には置き去りにしたるも数輛あり。これは人足賃の高価となりし為にて、この頃箱根より三島の四里間を一疋の馬を止むを得ず金十五円にて雇いしもある。

小田原町役場は、新築に着手の爲、唐人町の青物町寄りに借家し執務中なりしが、これも敢えなく倒潰し、負傷者も出し、一日の午後には焼失して、御用邸の正門前に三脚のテールを置き町長その他三人、いまだ何を為すの方針も立たず夜に入りては高等女学校の焼け跡に移り、第一に困るは食物なれば、町内に在りしは直ちに徴発に着手し、通商銀行に在庫の白米、玄米七百俵程、その外とも合計千五百俵程を得て、取りあえず女一人二合男一人四合の施米をなし、一時の窮を凌ぐこととはなしたるも、以後の準備としては、當時町会議員の岩下清之助は一日の震災に家屋土蔵も倒壊し、かつ妻女の負傷し、裏の竹藪に避難中に、米商だけに当町の在米高が胸に浮かんで来た。この儘ではとその意見を町長に談話したるに、町長も考慮中にて速やかに同意し、その方面の奔走是非に依託され、負傷者のあるにかかわらず承諾し、出発の仕度に帰宅し、再び仮役場に至りたるに、町長が陸地は交通の出来ざれば、船

の雇入れを山田又市に相談したるも、この風浪では船は勿論人命の保証とても無く引受は不可能と謝絶され、如何とも困惑と聞き失望したるも、遂に山王原の杉山伝次郎の好意にて発動機船の交渉が出来、兎に角東京に向けて出発となせしも、果して何れにて買付け得らるるや不明なれば内務省と愛知、静岡、千葉の三県知事と回漕の爲には横須賀鎮守府と海軍省に宛たる、町長今井広之助の請願書六通と金一万円を受け取り、高等女学校校長峯堅雅の兩人にて山王原より松仙丸に乗り込み、出発したるは午後の二時を過ぎたりしと。風浪に船足遅く、三崎近くにて夜に入りしに、船員は地震にて燈台に点火せざるを俄の故に下船中の船長をその儘として発航し、針路判明せざれば夜航は不可能とのことにて致し方なく三崎に寄泊したるが、出漁中より小田原に帰着し、直ちに

出船したれば、白米も有り且つ船主が出発に際し小鮪一本を投げ入れし故に食料には幸福を得た。

翌三日横須賀に上陸した。これは米はいずこにてか買入れは出来得ても運送には軍艦の援助を請願の故であった。然るに鎮守府に於いては本省の指揮に非ざれば不可能という事にて、幸いに鎮守府より派遣の探海船に便乗を許され、今日の午後九時芝浦に着岸はしたが、東京は最早戒厳令を布かれた為、衛兵に行く先々での推問に歩行が遅延し、漸く芝口

に至ると又推問^(推問)された。この時迄は、海軍省に船の請願を先決となせしが、内務省に米の請願するを得策と思考したれば、行く先を内務省と答えしにその証を求められ、願書と現金示して通行は許されしも、かく各所に推問を受けては容易に内務省に到達は不可能と心付き、衛兵に向かつてかく多額の公金を所持し、途中甚だ不安を理由とし護衛を請求したところ直ちに許諾したるに、幸いにも一輛の自動車疾走し来るを衛兵が推問し、かつ内務大臣、官邸迄同乗を厳命し、衛兵二人と四人が同乗し、午後十一時頃官邸に乗り付けしも、正門は閉鎖されありたれば、衛兵が官邸守衛の巡査に旨を通ずると邸内より案内者が出て来た。次官邸に於いて井上内務次官に再会して事情を具申し請願書を差し出すと直ちに御用邸の安否を問われたので、御建物は勿論周囲の堅固なりし旧城の石垣も全部崩壊との答えに震災の非常なるを直感せられた様に思われた。それは次官が前神奈川県知事で小田原の地理を知らるる為だ。

不安らしく見えたので、貴下の御親交ある片岡永左衛門の去る一日に町長と談話する傍らに同席したるに、自分家族の凶事を談話せられしも、貴家の御家族に及ばざりしは片岡の平素の性格より推察すれば何等異常なく、ご無事なるは確実ならんと付け加えしに、やや安心せられし様にも思われ、なお今回の救済に援助をも依頼したるが、結果に就ては何の挨拶は無かりしも、効果ありしかと思わる。

午後に至り、井上次官より、軍艦膠州を清水港に回航し、静岡縣知事に電命し、尚衛生隊も急派し、ついで東京横浜同様に取扱いとの恩命を得て直ちに辞し、同夜は芝浦の大井町青年団のバラックに宿泊し、翌日海軍の特別用小艦艇に便乗し、横須賀よりは待たせおきたる松仙丸に移乗し、五日に帰町した。

六日には静岡縣より積載の白米五百俵、外米七百袋その他食料品等を軍艦膠州にて小田原浜に陸揚げし、人々もこれを見て安堵したるが、不幸にも岩下令閤は夫君の留守中遂に永眠せられたるは同情に堪えぬことである。

小田原警察署は石造りなりしが倒毀し、箱根口内なる御用邸裏門前の路傍に、一日より小田原区裁判所検事出張所とを仮設し、テント張りにて事務を取り扱いたり。

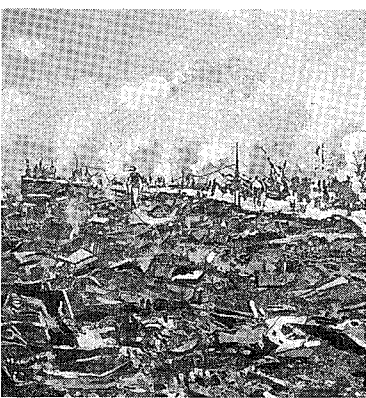
三日より神奈川県に戒嚴令を施行せられ十五師団司令部を小学校の焼

け跡に置き、小田原警備隊司令部も設置となり、死体の発掘、道路の修繕、橋梁の応急架設にも従事せられ、町民も神奈川県警察部に於いては巡查の手不足のみならず、奔命に疲労して不安を感じ居たる際になれば軍隊の出張に安堵し、かつ諸種の労役を目撃し有難味を実感したるが、各村落は食料の欠乏を司令部に訴えたれば小田原町にては町民の食料として内務省の手を経、苦勞して準備したる米類の徴発を命じたるも、町長は町民の飢餓は目前なるに町長としては応ずるを得ざるも、職権を以てするは貴官の自由任すと頑として承諾せず。郡長の奔走により徴発に□す湯本村に外米五拾袋を分与するをして落着したるに、小田原警察署長も行旅人の食料窮乏者に警察署に於いて、給与の為、拾五俵の白米を請求せしも、もし必要あらば町役場に本人より請求さすべし承諾せざりしは至当処置なりしもとにかくにそれ

の筋の感情を害したりとの風聞もした。

九月廿四日には山梨戒嚴司令部官が当町を視察し町の当局および町會議員各区分長等にこの際に処する誠意慰問品の配給に付き訓戒したるが、司令官は各被害地に一般的の警告なりしか、又は小田原警備司令部員の報告を斟酌したるかは知らざるも町民中には痛快に感じたるも有るべきも、されど今回の如く町全部の被害なれば、役場員も名譽職も、家族の生活等の為、他より見て充分とする活動をなすの余地を得ず、町民に於いても不平なきに非ざるも止むを得ざりしなるべし。その後軍隊も追々に引き揚げたるも憲兵本部は取りあえず停車場内に仮設したるを郡役所前に仮屋を新築し引き移りたり。

食料に次いで欠乏の建築材料に就いては、委員を静岡に遣し、縣庁の手を経て、町役場にて買入る苦心なせしも品不足にて充分に買入るを得ざりしに、商人各自が山方より仕入るれば競争は免れず、自然高価となるを考慮し共同販売を計画したるに、材木商広石広助等は承諾をなさざりしが、十一月一日より役場にて直接静岡縣より買入れたる残木を基礎とし、材木商組合合同の廉売を開始し、個人商人より幾分の安価なりしも経費多く、意の如く安価になし得ざりしは、品物の少なさと運搬の不便に、運賃の騰貴に加えて運送店の店員船の關係者に迄も手当てを



焦土と化す 小喜次郎画

なさざれば船の繰り合せも不可能等の為なり。

疾病者に対しては、当地の医師は薬品機械の買入れ、補給の不可能の為にただちに治療に従事し得ざりしも、九月五日に至り兵庫縣赤十字部医師、看護婦が来着し郡役所の焼け跡にて治療を開始し、非常に便宜を得たるが後に箱根口の文武館を修繕し引き移り、十月末日迄に治療の延人員一万五千人とのことなりしが、神奈川縣の救護班と入れ替わり引揚げとなり、十二月廿八日には社団法人済生会の治療所を万年町に建築し、救護班治療中の患者も引き受けて大正十三年の六月迄継続なしたり。

住宅に就いては、材木その他建築用品の騰貴は勿論なりしが、大工不足の為箱屋などの鋸鉋の使用出来得る者は俄大工と成りしもお引き足らず、日雇いも五円程となり、甚だ困難したるが、内務省より材木を無料にて供給され、町に於いて一時の雨露を凌ぐ極めて粗造りの住宅を各所に建築したるは数棟にて、合計六拾五軒を無料とし、その後低利資金六万三千百九十円を借り入れ町営住宅百七拾五戸をこれまた各所に造り、安価に貸し付けたれば自然に借家料が騰貴を抑制し得たるも、個人の建築は、他縣より大工職等の入り込み来たり潰家の引き起し修繕建築も請負いたるが、多くは工事の不親切に加え種々の事情よりかえって高価となり結局迷惑したるも少なからざり

き。

皇室に於かせられては本多侍従を遣わさせられ親しく御慰問を賜り、折は十二月廿五日、恩賜金伝達式場を小峯公園に設け、震災に就いての勅語、摂政宮殿下の御命令を奉賛し、死亡者に金拾六円、家屋全壊と焼失者には金八円を賜り漸く、御震憂成し下されしにもかかわらず、当局大臣の慰問巡視は勿論神奈川縣知事安河内麻吉の来原は年越え翌年の二月なりしには町民も遺憾となしたり。

各地の団体又は各宗教家方面より慰問あり。最後に十二月五日華族会館震災同情会長蜂須賀侯旧領主大久保子、外八名出張、貧困者千二百名に新調の白紋羽(地質厚く柔かく毛ばたせて織つたもの)長襦袢を慰問として給与せられたり。慰問品は当地保勝会臨時救済会の尽力を得て大阪府外七縣連合会の慰問品は三瓶山丸に鎌倉、小田原両町分を搭載し来たり、九月十八日当浜に陸揚げしたるは奈良縣分米千五百俵その他府縣の食料その外の慰問四百噸の予定なりしも、風浪の都合により幾分を増加し、之を老口としての最多額とし、九月十日に静岡縣の慰問品を最初の配給とし、米国の慰問品を最後として、大正十三年三月迄十数回に配給したる数量を価額とせばおよそ式拾万四程にて、食料品は延着と取り扱ひの疎漏とに腐敗せしも有れば浅草某婦人会としたる数個の箱詰めは汚穢甚しく雑巾にもならず却って罹災者を侮

辱すとの感情を慮り遺憾ながらも焼棄なしもある。

配給の方法は被害の程度を斟酌したりと云ふも怠慢の為に遅延せしとか、公平を欠くとか、被害者の苦情もあり、該委員中にも多少の欠陥はありたらんも、かくの如き地方無前の災害に際しては、当局者も統一を欠き委員に於いても多少の専断もありて町民の感情をも善したるはこれまた止むを得ざりしならむ。

静岡県は隣接したると、内務省よりの懇望もなしたるが故か、食料材料等の物資を供給せられしのみならず九月廿二日には庵原在郷軍人連合會員は救護に出張され、道路の障害物取除等に活動もせられ、震災直後には食料を携帯せざる者の箱根越えて来行するを警戒せられたり。参考にもと編者當時の日記を左に掲ぐ。此日記は九月三日に至り漸

く筆紙を得て覚書せしを数日後に清書せしものなり。(後掲掲定)

「編集付記」

◎この稿は、謄写版刷り原本の「駅鈴余音」に所収の「明治大帝御賜名旭日桐」と小田原の大震災」の題を「関東大震災」と改めた。

◎表記を次のように替えた

旧かなづかひを現代仮名づかひに改める
漢字は「常用漢字表」に掲げられている
新字体に改める

東京朝日新聞掲載

救ひの神の外科醫と井戸掘

|| 小田原町復興史を飾る人々 ||

余震は頻々とくる。第一小学校、足柄病院等々十二ヶ所から發した火災は、小田原目抜き場所を大半焼拂ひ逃げ迷ふ罹災民、傷病者を背負つて逃れる町民は、御幸ヶ濱に八千人、居神社、第一、第三小学校附近に各千五百名、小田原驛付近に三千名を收容したが、二千余名の傷病者に手當を施す醫師がない。このときこれ等二千余名の傷病者の救済主となつて現はれたのが外科醫間中直七郎氏であった。患者を合せて五十五人の

大家族が、一人も傷つかず奇蹟的に助かった。感激の間中氏は總ては神の加護であると直感するや「傷病者はおれ一人で救つてやる」と眞裸體のまま今將に自宅に延焼せんとする火災をも顧みず、大沼副院長日下葉劑師に四人の看護婦と共に一日午後二時頃から、傷病者救護の大活動を開始した。夫人は一日お産をしたがそんなことは構つてゐない、家を忘れ、身を忘れ、シャツ一枚にメスを握つて奮闘すること十余日、第一小学校のテント下にたてこもり、

大地震の思い出話

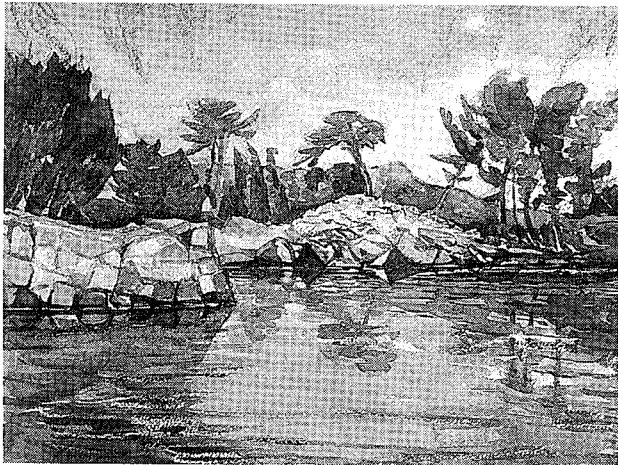
相澤 栄一

前夜来の豪雨も上がって、

九月一日の朝は、紺碧の空に真夏の灼熱の陽が照りつけていた。中学二年生で、暑中休暇中だった私は風邪

気味で、薄い掛布団の上に寝転んでいた。十二時少し前であった。地震だと気付いた瞬間、地鳴りと共に、とても立って居られない大地の激動で、忽ち家は傾

崩れた御用邸隅櫓 小喜次郎画



き、床も落ちて、私は這いずりながら表に出た。路面の各所に地割れができ、不気味な口をあけて、大地が怒って居るようだった。

城址の白垂の隅櫓も解体されたようになって、城石と共に濠に投げ出されていた。前の尋常高等小田原第二小学校のコの字型、二階建の大校舎も全壊した。大地から上昇した土煙で、青

空も、真夏の陽も見えず、まるで夕闇のようだった。絶え間なく続く余震に、私はこの世の終末かと、思ったりした。

前の小学校の運動場で、遊んでいる筈の第二人の安否が気遣われたので、父と共に校舎の裏

に急いだ。校門の石柱が倒れて、其処で遊んでいた並びの「煎餅屋」の幼児が掉ましい姿で倒れていた。校舎が、つんのめるように倒れて、通路を遮っていたので、運動場に出るのに手間どった。だが弟達は仲間と共に、大地震の猛威に怯えながら、運動場の真ん中で踞っていた。彼等が皆、

無事だったので、私も胸を撫でおろした。其処では、桜の老木や、太い青桐が根こそぎに倒れていた。父が仲間の子供達を彼等の家に連れて行ったので、私は弟二人と共に家に戻った。鐘撞堂の城石、同様に石垣も道路に投げ出され、建物はその上に逆立ちになっていた。道路よりの濠の石垣は殆んど崩れ落ち、対岸の、安山岩の巨石で構築された、城郭の長い堅固な石垣も低い処は横に押しあい、歪んで残された処もあったが、高く積み上げられた処は殆んど崩潰し、大地震の猛威を物語っていた。濠の北側の埋立地に建てられていた、洋館、二階建ての文化住宅も濠に、のめり込んでいた。

父だけが傾いた家に残り、

同氏のため手當を受けて救はれた者實に一千余名に達し、不幸死亡した者は僅に四名しかなかった。小田原町民の震災の功勞者といへばまづ間中氏の徳を賞めたたへる。

震災の直後食糧にも窮したが、一番困ったのは井戸の破壊、水道の決壊飲料水がばったり止まったことである、焼けのこった小田原電鉄製氷貯蔵所には罹災民が殺到して、三日間に二百トンの製氷を持ち出してしまったので、これ又徴發令で差押へ、醫療に必要以外は供給を禁じたので、飲料水は益々欠乏し緑町方面で

は、一桶の水を得るのに近くて五町、遠くは七、八町もくみに行ったため随所に水騒動が起った。

この時緑三丁目井戸掘業柳川菊次郎君は、苦闘三十余年新聞賣子からたたきあげ汗と油の結晶として震災の前日完成したばかりの、我家の全壊も顧みず、四日から夜を日に繼いで緑三丁目四一三地先、緑二丁目消防器具置場跡、新玉四丁目八百半わきの三ヶ所に共同井戸の掘さくを開始し、十日あまりで掘りあげて住民に提供したので、この地方の罹災民は始めて蘇生の思ひをしたのである。

私達兄弟は母と共に、薄い寝具を持って、安全な場所に避難する事にした。御用所から弁財天への道を急ぎ青橋を渡り道の西側の土手を登っていった。其処では笠のように茂った、「まき」の老木が頑丈な根を地表に、あらわしていた。私達は其処に陣取って、一夜を過ごす事にした。地震の直後から街には火事の気配があったようだった。

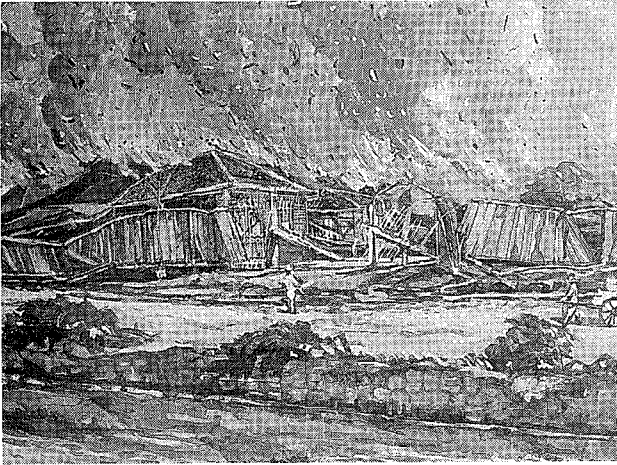
日暮れて、灯を失った月光だけの暗い大地。此処が

ら見える街の空は燃え狂う猛火で赤く染められていた。時々起る竜巻の不気味な音、旋風に煽られて、屋根のトタン板がまるで紙切れのように、火焰の中を空高く吹き上げられていた。私達は余震が揺れ動く中で、暗い野天の寝床に横たわって、燃え放題に燃えている、地震にともなう大火の恐ろしい風景を眺めていた。疲れていたせいかわ、知らぬ間に寝てしまった。家の事が心配になり、私達は翌朝、

早く家に戻った。処が私の家だけが一軒焼け残っていた。居残った父が一人で、一晩中、懸命に消火に勤めた結果のようだった。

裏の町立小田原高等女学校の二階建の校舎も焼失し、書記の向井老人が、又前の第二小学校の倒れた校舎の下敷となって、男の先生が掉ましい犠牲となられた。御用所の土族屋敷は焼けなかったが、その一軒に私の中学の同級生の辻本君がいた。彼も倒れた家の梁の下敷になり、懸命に這い出たようだった。

燃える小田原高女 小暮次郎画



須藤町、大工町、台宿、一丁田、青物町、千度小路、宮の前、本町、代官町、等、海辺の街まで、見渡す限り焼け野原になってしまったので、鐘撞堂の前に立つと、青い相模の海が眺められた。城と共に城下町、小田原の象徴のような、土蔵造りの商家が建ち並んでいた須藤町の街並。この町の掛け替えのない歴史的な文化遺産も、一夜の中に灰燼となってしまった。大きく傾いた家には、住めなかった。

父は、裏の高等女学校の運動場の片隅にあった肋木を利用し、商売柄、店にシート用の厚い綿布があったので、それを張り廻らして、天幕小屋を造った。其処で私達と、懇意な平井書店の家族四人との共同生活が始められた。其処には、宮小路の芸者置屋、青物町の玩具問屋、其他の方々も仮小屋

を造って住んでいた。何処の家でも配給された玄米をビール瓶に入れて、竹の棒を使って搗いていた。又配給の小麦粉を使って、「水団」という代用食を造っては食べた。燃料は、薪と炭火で、灯は、当時露店商が使っていたアセチリンガス燈であった。

二日目位から、「朝鮮人暴動」の流言がこの町にも流れ、夜になると、竹槍を持つたりして、夜警が始められた。暗闇故、「山だ川だ」と、いう合言葉を使うよう打合せされた。「朝鮮人が井戸に毒を入れて居る」等という流言も流された。だが震災地の何処にも、朝鮮の人達の暴挙等は起こらなかった。明治四十三年八月、韓国を併合した日本は帝国主義的殖民政策を強行し、彼等の自由、人権は無視され、抑圧、収奪、搾取が敗戦の日まで、長い年月続けられてきた。大地震の恐怖の中で、抑圧者は、抑圧されてきた民族のレジスタンスを妄想して、不安に脅え、それが流言に転化されたのかもしれない。

明治の末期、文学に精進しながら、キリスト教への

教養を深め、社会主義への関心も抱いた、野口雨情が大正デモクラシーの昂揚期に、諦めて生きるしかない庶民の遣る瀬なさを、作詩したのが「船頭小唄」であった。この唄が人々の感動を呼び、当時、盛んに唄われた。大災害になってから「あんな唄が流行したから、地震が起きた」という馬鹿げた流言も流された。

又当時私達の日常の用語として「此の際」という言葉が盛んに使われたようだった。

その頃はカメラを持って居る人は稀だった。小暮次郎君が「ベスト」を持っていたので、私は彼と共に酒匂橋から米神付近まで、写真を撮りに歩いた。酒匂川のコンクリート橋は寸断されていた。根府川では箱根、外輪山の聖岳、側面の大山津波で、土石流が白糸川の谷を沿って流れ、川沿いの部落を埋没した。私の中学の同級生で、野球投手だった頑強な矢島君も掉ましい犠牲となった。

又私が学んだ第一小学校から根府川小学校の校長になられた、中学同級生の父君鶴塚先生も根府川駅で悼

ましいめに会われた。根府川駅に入った電車が数輛、渚に転落し、父の友人も怒から、やっと這い出たようだった。

陸の交通機関が途絶してしまつたので、船か歩くしかなかった。京浜から歩いて郷里に帰る人々で、東海道は賑わった。その人達のために、町では焼けた役場に近い裁判所の角で、代用食の「すいとん」を持ってなしたりした。

関東大震災以来、七十年の長い歳月が流れた。

地震国日本では其の間に、各所で大きな地震が起きている。そして、いつも国民の多数が多大な被害を受けている。地震予知の科学も進んではきた。だが、そのテンポは遅い。

地震研究費も、防災のための公共事業費も、余りにも少ない事を嘆かざるを得ない。

今この国では、国際協力だ、国際貢献だ等という言葉が氾濫している。だが、その前に、自国の国民のために、緊急に成さねばならない数多くの施策が山積している事を、為政者達は忘れてはならない。

関東大震災の雑想

市川 一郎

始めに

地震、雷、火事、親父？は昔から怖いものの例えに上げられているが、地震と火事はその横綱である。

一 地震の動きを見た人

地震は震源地から地震波となって広く伝播して行き、ドカンと来る本震(S波)の地表での速度は、一秒間に五〇〜一〇〇mと言われているが、実際に見た人は少ない。関東大震災で経験した二つの例を紹介する。

1 田島の弁天山で見た人

これは本人から直接聞いた話である。

当時小田原電気鉄道(東京電力の前々々身、以下小田電)の二〇KVの送電線の工事のため、石井太次兵衛、他二人の電工が、JR国府津駅北西約一・五kmの田島弁天山(図1⑫)の鉄塔上で作業をしていた。

昼時になったので「飯にしよう」と言いながらふと小田原方面を見ると、土煙りが上がり段々と近づいて来た。「何だ？」と言う間もなく鉄塔が揺れだしたので「地震だ！」と言って鉄塔にしがみ付いた。

2 神保幸太郎氏の体験

震災前夜は、梨の実が落ちるほどの大暴風雨であったが、一夜明けると昨夜の嵐が嘘のような晴天となった。同氏は晩秋蚕の桑摘みに、JR御殿場線下曾我駅の西北約一・五kmの曾我谷津村(小田原市)字正木田⑪の畑に行き、桑の葉を摘み、昼近くなつたので桑の葉を入れた籠を背負い、桑畑から田の畦に降りて数十歩あるいた時、「ぐらっ」と、東側の田の中に倒れた。顔を上げて見ると、松田山⑦の方から崖崩れが始まり、曾我山をだんだんと田島の方へ進んで行くのが見えた(父君からの伝承を詳細に神保光定氏から聞いた)。

この二例は次の震源地と考えられる。

二 震源地

1 本地震の震源地は確定してない

関東大震災の震源地の推定は、学者や時代と共に変わっている。

最初氣象台が発表したのは内陸で、平塚北西部金目付近であったが、十数年前

の理科年表(地震研系のデータ)は大磯沖約一五km最近平成五年版は江ノ島沖約二二kmのところになっている。今でも松田の北方説(氣象庁系)もあり、どの学説をとるかで変わるものである。神奈川県立博物館発行の『南の島から来た丹沢山』に、

「一九二三年関東震災のときS領域(房総半島南部を中心とし、小田原を西端と

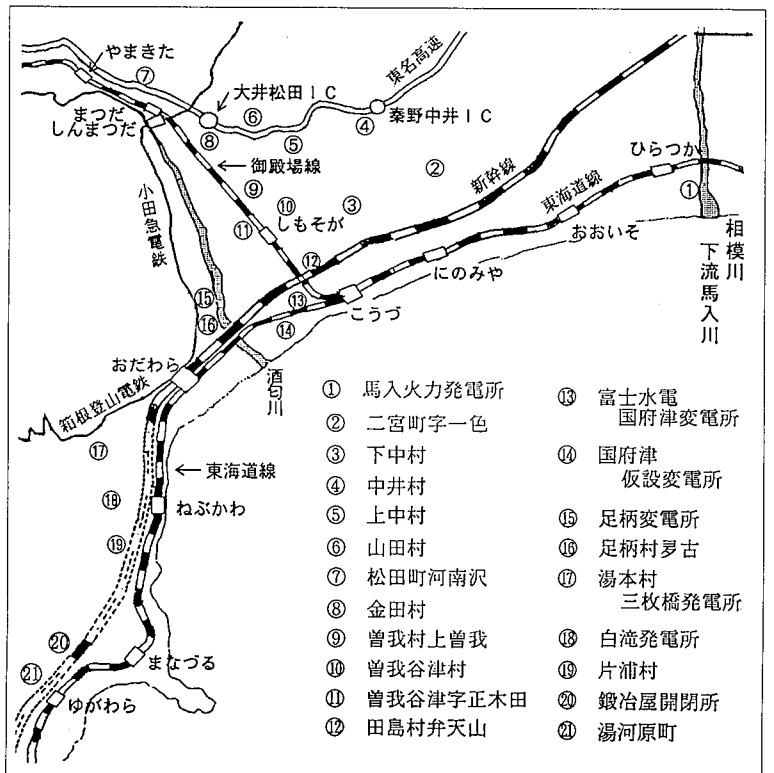


図-1 関東大震災の雑想 付図

する広い範囲)のプレート境界面における震源断層活動と同時に、西相模湾断層でも震源断層活動があり、それが真鶴岬、初島の隆起や、小田原を含むこの地域のはげしい地震の直接の原因と考えられる」とある。

図1-2は西相模湾断層を震源地と想定した同書の図に一部加筆したものである。つまり広域震源の地震と、局地地震が同時に発生した

という説であり、かなり有力な説とされているが、これが震源地をわかりにくくしているらしい。

前項の二例は広域震源による国府津、松田断層の地割れと局地地震の小田原側からの地割れの地震動を、見たものと考えられる。

2 松田町河南沢⑦ 東名高速松田バス停付近。

震源にまつわる話として

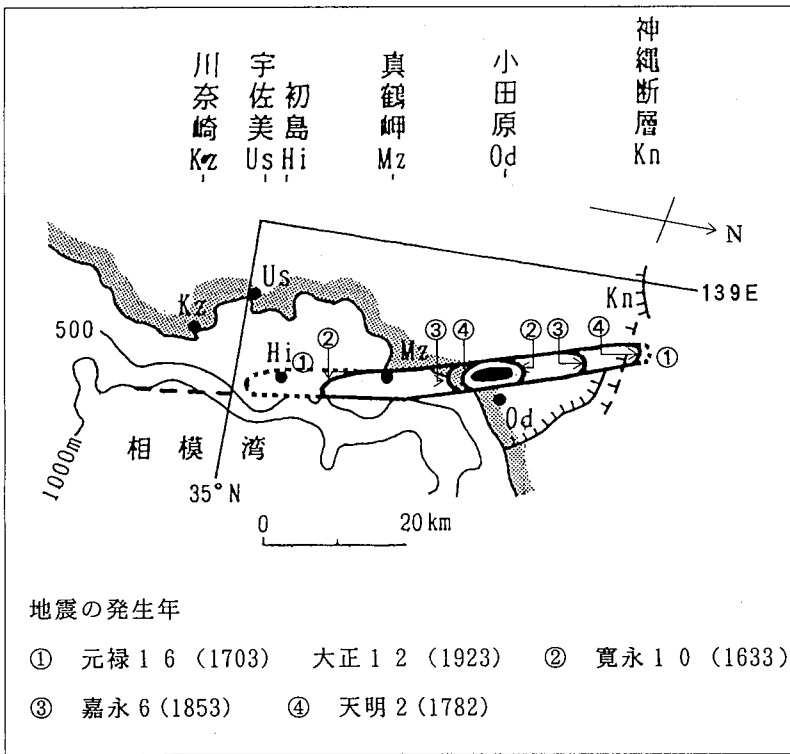
筆者がこの震源地？を知ったのは、次の経緯がある。曾我兄弟の仇討ちで有名な曾我氏が、平安時代、曾我谷津⑩(小田原市)に住み、その後生活用水とお堀の水を供するため、殿沢川の上流で分岐し、菊川と言う小さな川を造った。

正の末にトンネルにした。筆者がこのトンネルを調査中(断層(地割)を発見したので、断層の成因について知りたいと思い、つくば学園都市の通産省工業技術院地質調査所の地質相談所を訪ね、山崎主任研究官を紹介された。

昭和六十一年に、小田原市が曾我氏の住居跡を発掘調査した際、地表近くで断層が見られた事を話し、持参したトンネル部と断層部分の岩と土をお見せしたところ、「地層の動きが判らないので、断層と断言出来ないが曾我山が強い力で押された時出来たひび割れではないか」と言われた。

その後雑談に移り、筆者と前記二人の地震体験の大略を話した時、特に神保氏の話に興味を持たれ、「倒れるのと、山崩れのと、ちらが先か」で、震源地の方向が判断出来るのだが」と言われたが返事は出来なかった。

その時「東名高速道路路拡張工事のため、一九八五年埋没文化財の事前調査をした時、河南沢で横穴墓の床と、同位置に地表に近い所で、富士宝



地震の発生源

- ① 元禄 1 6 (1703) 大正 1 2 (1923) ② 寛永 1 0 (1633)
- ③ 嘉永 6 (1853) ④ 天明 2 (1782)

図-2 西相模湾断裂上の過去の大地震の震源域の推定

黒く塗りつぶしたところは毎回破壊するらしい

永山噴火の火山灰の層に断層が発見された。この断層が、宝永山の噴火(宝永四年一七〇七)以降に出来たものとすれば、元禄、大正のいずれの地震であるかが研究されていたが、今の話では大正に間違いない」と言われた。同氏は当地を良くご存知で、曾我山には小断層が沢山あり、剣沢のダムの上には砂利の盛り上がり断層があると話された。

大正七年八月一日、出力二、一〇〇KWの三枚橋発電所が完成し、余力が出来たので大正七年小田原紡績(現富士フィルム小田原工場の所)に五五〇KWの送電を開始した。たまたま欧州大戦による未曾有の好景気で、いわゆる成金時代となって電力需要が急増し、発電余力は束の間電力不足となり、一馬力(昼間定額制)一〇〇円ぐらいの権利金の値段がついた。

この電力不足を解消するため、水陸の便の良い馬入川の河畔に、五〇〇KWの発電機二台を持つ火力発電所①を建設し、平塚市内に変電所を作り、湯本の三枚橋発電所⑦足柄村多古(小田原市)の足柄変電所⑮間を、二〇KV(KV=一〇〇V)二回線の送電線で連絡する計画がたてられた。発電所用地は、現在の平塚工業(株)の所に四、〇〇〇坪(一・二ヘクタール)の土地を購入し、「アメリカのGEに注文した発電機の一は据え付けを終わっていた。他の一台は横浜で陸揚げ中に地震にあい、海中に落下してしまった」と後日関係者から聞いた。タービ

ンの排気用冷却池は、昭和の中頃まで残っていて魚釣り場になっていた。

写真1は筆者が撮影した小田原紡績の煙突が地上約1/3で折れたものである。

当時、三枚橋発電所から平塚まで三KVで配電していたが、同方面の需要増加による電圧降下に対処するため、前記のとおり二〇KV送電を開始したのである。

焦眉の急に対処するため、大正十年三月酒匂村小八幡

⑭(現在久保田鉄工所付近)

に国府津変電所を建設し、三KVから二〇KVに昇圧して平塚変電所に送電した。その後国府津、足柄両変電所、三枚橋発電所間の工事をすすめ、震災当時には足柄変電所から昇圧して送電していた。

2 変電所の復旧

小田電の三枚橋発電所、その他箱根付近の発電所は全壊した。

次に復旧の手順を説明する必要がある、当時の配電事情を説明する。

前に記した海岸沿いの他に、酒匂川左岸は松田町に近い金田村⑧(大井町)まで、また曾我山東側は今の

中井町と接した下中村③(小田原市)まで小田電で配電していたが、現在、東名高速道路で分断された中井

村④(中井町)、上中村⑤、山田村⑥(以上大井町)の各村は、採算上周囲の電気会社は供給を躊躇していた。

この村々に、今の湯河原町⑭まで営業していた富士水力電気が、大正十年頃に吉浜村鍛冶屋⑯(湯河原町)から国府津まで一〇KVの送電線二回線と、国府津の田圃(現在日立製作所付近)

に国府津変電所⑬を作り、これから国府津山、曾我山の頂上に三KVの配電線を延々と建設して配電を開始した。

この他に、白滝水力電気が片浦村根府川⑰白糸川の upstream に発電所を建設し、小田原町幸一丁目(本町二一四)の小田原製氷(現在神奈川県冷蔵小田原工場)に、特約供給をしているという状況で震災に遭遇した。

富士水電の送電線と小田電の前記二〇KV送電線が、足柄村多古⑱で接近して簡単に接続でき、また鍛冶屋方面は被害が比較的小さく、電源が健全であることが判明したので富士水電

に応援をお願いすることになった。

神保磯治技手は責任者として電工二名を連れ、富士水電の国府津変電所に行き、事情を話しつつ送電されても危険のないように処置をお願いし、その後富士水電

の送電線を巡回しながら根府川で野宿をし、箱根山を越えて鍛冶屋の開閉所に行き、いままでの経過を説明して応援送電お願いしたところ快諾された。

保安電話線に故障箇所があったので、送電線二回線の内一回線を電話線に流用することとし、万一電話連絡不能の場合を想定し、日時を定めて送電をお願いして時計を合わせて帰社した。

帰社後すぐに送電線の接続、変電所の接続換え(単相三台予備一台をV接続とし、一次並列、二次直列)をして予定どおり受電ができ、平塚変電所にも足柄変電所をとおして送電した。その系統図を図3である(神保氏から直接聞いた)。

写真3、4は神保氏が鍛冶屋からの帰途撮影した、根府川のトンネル入口を警戒する兵隊さんと、墜落した汽車である。

3 配電線復旧

配電線に三KVを配電する事は危険なので、変圧器を外し高圧線に一〇〇Vを送り、官庁、病院に最小限度を点灯した。此の日は九月十日であった。

機材無し、人手無し応援無し、無い日々尽くして第一に高圧線を復旧し、また焼け跡に仮設電線路を作り、戒厳司令部の命令で十六燭街灯四三〇灯を九月二十五日まで湯本、平塚間の主要道路に点灯した。

九月二十日頃から健全な家庭に送電するため、安全確保と資材流用のため、不要電線を撤去し、電線接続箇所の絶縁テープも特に必要以外は使用せず、一戸一灯宛の工事を始めた。

筆者らは酒匂川以東を受持ち、更に酒匂川左岸の村々と国府津方面の二手に別れ、筆者は国府津、田島と進め、金田村あたりが点灯したのは十月初めのように覚えていた。下中村二宮町の奥、字一色⑳まで点灯したのは十二月半ばだったと思う。

四 余録

1 電動機の交換に応じなかったお客さん

前記した三枚橋発電所落成を期に、電動機の無償交換をしたが、三〇Hzの電動機が、五〇Hzに比較して過負荷に耐えることを知ったお客さんのうち、二宮の三馬力の精米屋さん、湯本の七・五馬力の製材所(須雲川の水利権の関係で無料)は昭和になっても交換を承知しなかった記憶がある。

なお大正十一年十二月までは電力契約は定額、従量

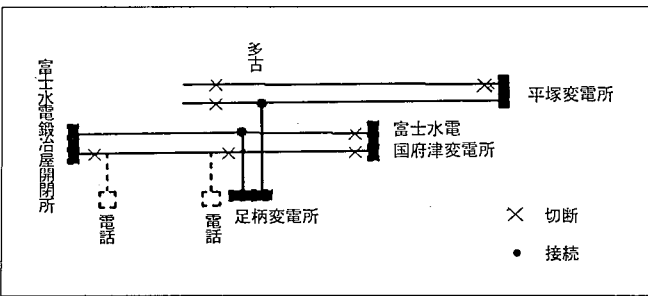
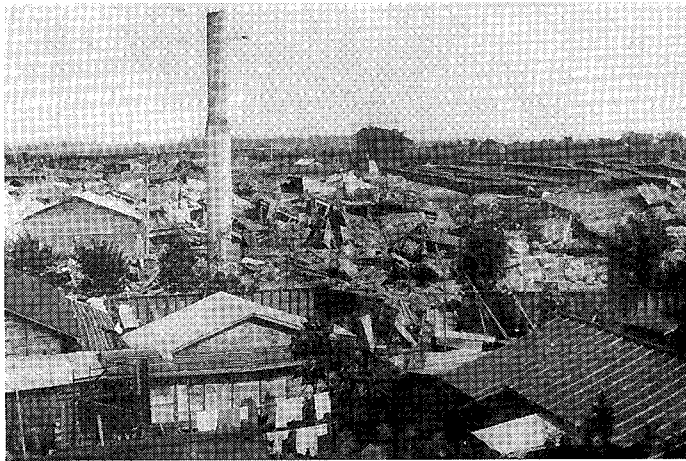


図-3 送電系統図



1 震災後の小田原紡績株式会社

所に、これも日本に一ヶ所しか無かった、発電機の急停止時の水圧緩衝用、圧縮空気筒を備えた。当時としては高落差（有効落差六八六尺—二〇九・七m）ペルトン水車の発電所を完成させ、また電車の直流電源に五〇Hzでは初めて、電動発電機に代えて回転変

外線係が変圧器を外しておくので、我等低圧の復旧班は全壊したり、人の住まない半壊の家の電線は危険なので、撤去して流用していた。酒匂に四五度位に傾き、家の畳建具も無く、直径二・六mmの銅線一本引込線で支えられた家があって、筆者が駄目だと言う合図に従って、電柱上の電工が電線を切ったので家は倒れてしまった。その時、どこからともなく親父さんが出て来て「この家は明日おこすことになっていたので壊されてしまった」と怒られたことは、思い出す度に気の

毒なことをしたと今でも思っている。

5 九月一日の筆者

(1)国府津駅から小八幡へ

当時小田電に勤務していた。

熱海線は真鶴まで開通しており、東海道線は今の御殿場線で勿論電化はされていなかった。汽車の信号方式は、東京真鶴間は現在と同じもの、国府津から下曾我方面は腕が水平、斜め、下と三位に変わる装置（夜間は緑、橙、赤）を、ワイヤロープで駅から信号掛が操作していた。

各駅の電灯は夜間だけで、八、一六、二四、三二、五〇、一〇〇燭で燭光別（大正十二年九月現在）の定額料金で供給していた。昭和三年熱海線の電化と同時に自営に切り替えられるまで、信号用の電氣は昼夜間必要なので、足柄変電所から鉄道の信号用の電柱に共架して、国府津駅構内の電力区に送り、ここに積算電力計（電量計）を付けて取引をしていた。

毎月一日の十二時に、電力区と小田電で立ち会い検針をし、確認をすることに

なっていた。九月一日に検針に行き、十二時に検針すると十二時少し過ぎに出る下りの汽車に乗れず、一時間ぐらい待つことになるので、係員にお願いして、少し前に検針を済まして確認をしてもらい、国府津駅のベンチに腰掛けて二、三人の人と発車を待っていた。

その時ドカンと突き上げられるように体が大きく揺られたので、地震だと思い天井を見上げると、電灯が大きく揺れていたが建物には異常がなく、外に出てみたが駅前の建物も変形はなかった。

しばらくして、国道から来た人が「下の方は家が倒れて大変だ」と話しているときに他の人が来て、「国府津館で、腰にベンチを付けた人が石に敷かれて動けないでいる」と言った。当社の者は来て居ないはずだと思いつつ、余震の続くなかを国道を渡り、海の方を見れば、石作りの国府津館は跡形も無く崩れ落ち、海が目の前に見えた。

ふと見るとすぐ傍に、幅一五×厚さ一八×長さ九〇cmぐらいの石を背中に乗せて、うつ伏せに倒れている

の二制度であったが、九月以降は従量制で、負荷率向上のため（昼夜間送電に比較して電氣料金が割安になっていた）原則として動力は昼間（日の出三〇分後、日の入り三〇分前）、電灯は夜間送電であった。

参考 電力料金は最低料金制で

二〇馬力 一馬力 昼夜 間一〇円 昼間 五円

電氣料金単価

一〇〇KWhまで七銭

超過四〇〇KWhまで六・五銭 以下略す。

2 小田電の技術陣

当時の支配人は半田貢（工学士、前主任技術者）、主任技術者は永江篤といった。登山鉄道が計画された明治四十三年にはアパート式であったが、スイスのレーティシェ鉄道などを参考にし、現在の八〇／一、〇〇〇の勾配と、半径三〇mの曲線のある日本唯一の箱根登山鉄道を完成させた。

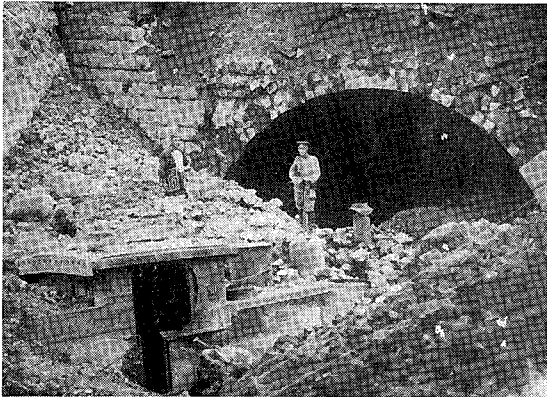
3 火力発電所の主任技師

この人は超人と言うか、奇人と言うか、人間は左右対称に出来ているという持論の人で、日常の生活は左右両手を同様に使い、靴は左右を毎日履き替えていたそう。震災で工事再開の見込みが無いので、タイピストに英文タイプライターを退職金代わりに渡したということを後日聞いた。

4 家を倒した話

なっていた。九月一日に検針に行き、十二時に検針すると十二時少し過ぎに出る下りの汽車に乗れず、一時間ぐらい待つことになるので、係員にお願いして、少し前に検針を済まして確認をしてもらい、国府津駅のベンチに腰掛けて二、三人の人と発車を待っていた。

その時ドカンと突き上げられるように体が大きく揺られたので、地震だと思い天井を見上げると、電灯が大きく揺れていたが建物には異常がなく、外に出てみたが駅前の建物も変形はなかった。



2 根府川トンネル付近の惨状
立つは警備隊司令部の下士官?



3 根府川駅から墜落した汽車

人の腰にベンチが見えたので、どこかの電気屋と思ひ、火事場の一時力で石を動かして、引き出して見ると電巧舎(電業舎)の電工で、小八幡の譲原と言う工事屋さんであった。

居たが、相談の上帰る事にし、背負うように肩に掛け、国道を倒れた家を避け、落ちた親木橋を水に浸りながら渡り、自宅に送り届けた。

水幕が上がったのには驚いた。森戸踏切から国府津方面に二〇三〇m行つた所に、貨物列車が三mぐらい下の田の中に転がり落ちていたが、見に行く余裕などなく自宅に急いだ。途中上曾我⑨で、一〇cmぐらいの亀裂が道路を直角に横切っているのが見えた。その瞬間大きな余震が来て、目の前で高さ一〜二mの水幕ができて思わず後退した。

釜や鍋、米等を持ち出し、石でかまどを作り、母が夕食の準備を始めた時、はじめて昼飯を食わなかつたことを思い出し、急に腹が減つた思いが残っている。思えば長いような、短い一日であった。

離宮は増改築工事の終わった直後で、筆者は当時小田電に勤務しており、電気設備の関係で出入りしていた。二十六日は小田原地区の復旧工事におわれ、翌日ようすをお伺いに正門に行く。と左側にあった門番所の建物が無く、土庫だけが残っていた。

譲原君を肩にかけて駅前まで行き、駅内は危険なので、駅前の砂利の上に寝かせたものの具合が悪いので、駅前の「あさひ」から無理に戸板を借り、その上に寝かせてしばらく様子を見て居た。少しすると意識もハッキリとしてきて、家が心配だから帰ると言い出した。また津波が来ると言う人も

(2)小八幡から自宅へ
小八幡のお宮の近所から畑や田の畦を通って、崩れた親木橋の下を「こわごわ」とくぐり、森戸川に沿って森戸まで来た。道には所々亀裂があり、余震は続いていた。その途中、富士水電の変電所付近で田圃の水が余震の度に波うち、大きい余震のとき、幅が一〇mぐらい、高さが二mぐらいの

家では、地震と同時に家の中から前の広庭に飛び出した兄嫁が、幼い子供を残して圧死していた。ほんとうに今一歩(〇・六mぐらい)と言ふ所で、後ろから倒れて来た母屋の軒先に腰を打たれて倒れ、腰から下を葦屋根に押し潰されたのである。

震源は周知のとおり、地表で見られるときと、地中、または海底にあって人目に触れない場合がある。出現した例として関東大震災直後の北伊豆地震を紹介する。昭和五年十一月二十六日

奥に行き会つた門番(氏名失念)の話では、体にドンシンとする感じがあつたので、気がつくと布団を掛けたまま寝ていて、「さあ、さあ」という波の音が枕元で聞こえ、よく見ると天井も屋根も無くお星さまが見え、床だけが波うち際の砂浜にあつたそうだ。

うに今一歩(〇・六mぐらい)と言ふ所で、後ろから倒れて来た母屋の軒先に腰を打たれて倒れ、腰から下を葦屋根に押し潰されたのである。

この地震では箱根離宮(箱根恩賜公園)の中心近くを南北に走る約五mの断層ができ、関所側が約〇・三m下がっており、湖水を横切っている。

湖水平近くで三〜四mの崖上にあつたので、いっせに放り出されたようである。数年前この断層を探しに行つたが、箱根篠竹に覆われて見当たらなかつた。

余談

参考資料 石塚九蔵氏手記『小田原電気株式会社史』、内田哲夫氏編新版『年表小田原の歴史』、藤原咲平『地渦地裂及び地震』、昭和22年版平凡社『大百科事典』その他

関東大震災

の地震体験

富田千春

大正十二年九月一日の関東大震災

は、私が十三歳、小学校高等科二年の時だった。九月一日は一般の小学校は第二学期の始業式の日だが、農村の小学校は、春、秋に農繁休業があるので、夏休みは短かく八月二十五日頃から始まっていて、平常の授業日だったが、土曜日で学校は早く帰れた。父は足柄村役場に勤めていたが、前の晩豪雨の大水で飯泉橋が通行止で戻って家に居り、家族五人で昼食をすまし、私は座敷の縁側で少年雑誌を読んでいた。そこへあの大地震だ、ドーンという凄い音、ガタガタの大激動、地震だとも分からず無我夢中、裸足で表にとび出し十歩ばかり歩いたがもう歩けない。丁度そこに大株のヤツデがあり、それにしがみついて後を振り返ると、草葺屋根の母屋が、大揺れに揺れていたかと思うと、家の真中からへし折るように潰れてしまった。

父の話では、倒れた梁と柱を長火鉢で支えてくれたのと、全潰とはいつても、家のすぐ裏に太い楓の木があり、家屋がその木に寄り掛かっていたので、透き間から引きずり出せたのだとの事、裏の楓の木は、老母の命の恩人だと、何時までも大事にしておいた。

次から次の余震も少し収まったので、小学校を見に行った。ズタズタの道、地割れ口を恐る恐る飛びこし乍ら学校に歩いて行ったら、午前中勉強した校舎は何処へやら、無残な姿のペチャンコの校舎、校庭の老松けやきの大木だけが、いやに高くそびえ、学校全体がパカッと透いている。二階だった自分の教室を捜したが、とんでもない地面の上で、天井屋根がのしかかり、中は真暗で自分の机も分らない。でも天井は机で支えられ、もぐれる位の空間はあった。地震の時は先ず机の下にもぐれと教えられていた事は正解だと思った。近所の学校で生徒の死傷者が大分出たと聞いたが、自分の学校では幸、生徒が残って居なかったので、災害は全然なかったが、授業中だったらと空恐しくなった。でも先生は職員室で災害にあい二名亡くなられた。外に出て小田原の町の方面を見たら上の空一面すごい黄埃だった。

出しても、落ちて来る屋根瓦で怪我をする例も多く、瓦屋根は地震に要注意であるが「喉元過ぎれば熱さを忘れる」の例え、瓦屋根の魅力で大地震も年を経つにつれ瓦屋根も増え、又大地震と、これを繰り返かえした様だ。県西部小田原地震は七十年程の周期でやって来ている。関東大地震は嘉永六年の小田原地震から丁度七十年目だったが、その頃は地震の噂は全然なく全く突然の来襲だった。災害対策など全然なく、「今夜どうして寝むるか」自分で身の振り方を考える各家では、それぞれにバラックを建て始めた。潰れた家の中から、鋸、金槌、釘、針金を取り出し、縁の下丸太、張出し小屋のトタン板をはがし、何とか皆が寝れる掘立て小屋を急造した。生活の基本の衣食住、大正の頃は文化も遅れており、地震で放り出されても原始生活に戻るのには楽だった。表に石を並べてかまどを造り、燃料は薪、電気は数年前から来ていたが、石油ランプ、提灯なども日用品として持っていて、すぐ役立つ。水も各井戸があり、竹管の井戸ポンプは使えなくなったが、釣瓶で汲み上げて、水も濁らずそのまま使えた。農家は味噌も醤油も自家製で、食糧も豊富にあり生活に格別困った経験はないが、今は、電気、水道、瓦斯、プロパン等の文化生活では想像もつかない苦労が、やって来る事だろう。千代の災害は、住家百戸中、全潰八十九戸、半

潰十一戸とあるが、千代は古い屋敷も多く、屋敷の周囲の樹木も大きく、家がこれにもたれて半潰になった場合が多い。生木は地震に強い、後日蒿職などが急増し、ジャッキ等の道具を使って、半潰の家を起し、住める様にした。

昔から「地震の時は、竹藪に逃げろ」と教えられていたが、地震の地割れを恐れた為と思うが、地盤が弱いという関東ローム層の私の家の周囲千代台地では地割れは全くなかった。深さ六メートルもある我が家の井戸も地震では全く平気だった。地割れのひどい所は、台地周辺の傾斜地や盛土した所で、深く一〜二尺の口がパカッと開いており、そこに落ちこんだら大変であろう。

小田原地方は昔から地震の巣であるといわれている。県西部地震七十年周期説の七十年が来ている。今年の夏の記録破りの猛暑、大正十二年の夏も猛暑で、立秋入ってもなお焼くが如き暑さと記録があり、今年と似ている。もう大地震が何時来てもおかしくないという現在、地震の宿命は避けられないが、昔と違うのは大地震に備えての体勢で、新防災行政無線システム、市の防災行政無線屋外スピーカ、広域避難場所、防災倉庫、それに世界一設備の整った観測網と、大正の頃とは比較にならない。願わくは、各人の備えと心構えて被害を最小限に食い止めたい。

(平成六年八月三十日記)

過去を知り

過去を生かそう

西山銑太郎

大正十二年九月一日は土曜日で、高等小学校第一学年だった私は、第二学期始業式を終って、上曾我の久保田へ用事を二日つかり、途中母の実家へ立ち寄ったのが十一時半頃だった。十二時近くなったら伯母が「今日はお朔日だからお萩を作った、沢山食べな」と云った。農家が家で食事時にお萩を食べるには、丸めないで茶碗へ御飯をよそりその上へ直かに餡をかける。従姉がよそってくれたので食べようと思ったとたんにグラグラと来た。無意識に立ち上って入口の方へ行き外へ出た。あわてたので下駄が脱げてしまい、表庭のまん中へ来て気がついたらそれを握って地面に転がった。家の人も私に続いて外へ出た。最後の当主の従兄がヨロヨロしながら出ると、物凄いと煙と共に茅葺き屋根の家が倒れ、従兄の姿が一時見えなくなった。

私に「お萩を食べないで残念だったナ。鍋の中の餡は土ほこりが入ってしまったって食べられないだろうナ。おいしい事をした」とチラッと考えた事が、今でも時々思い出される。

みんな立てないので転がってる。やっと座れたら私は従姉と共に伯母にかたく抱かれて居た。

家の前の水田の稲も、その上の桑畑の長く伸びた桑も一面右に左にゆれて、頭が地面迄も届いてる。これは地震ではなく大風なのかと錯覚をした。

国府津・松田間の曾我山麓に走る断層の上の旧下曾我村は、地震の被害は実に大きかった。昭和三十一年月発行の『下曾我田島郷土誌』に依れば、当時下曾我村に於ては三五五戸(内神社・寺院・堂宇九を含む)で、全潰三二八戸(内寺院・神社・堂宇等八)半潰二七(内寺院二)、死者は実に四十一名に及んだ。農村の事ゆえ一戸と数える母屋の他に殆んどの家で、土蔵・物置・厩・下屋等があるので、その被害棟数に至っては大変な数になるのである。

特に我が曾我岸部落に於ては当時三十一戸(内神社・堂宇各一を含む)しかなかったが、母屋は勿論付属建物迄一棟も残さず倒潰してしまい、附近の見通しがよくなってしまう。従って死者も多く七名に及んだ。

なお、右郷土誌に依れば同じ山麓の旧田島村に於ては、全村一四三戸中全潰は一一〇戸、死者は八名を出している。旧曾我村に於ては全潰三〇六戸。半潰一六六戸、埋没四戸、焼失二戸、死者は四十五人に及んだ。同村は断層上の曾我地帯と断層を離れた平坦地域があった関係で、この様な数字になった事と思われる。同じ隣村でも曾我山から遠く離れた旧

上府中村に於ては、全潰二二三戸、半潰二二三戸、火災一戸、死者は八人である。半潰でも修復の後長く使用された家々は数多くあった様である。

従って関東大震災といっても、地震そのものの被害は、曾我山麓は最も激甚を極めたものではなかったか。幸にして大正十二年の節は、下曾我地区では火災は一件も出さなかったが、建物は、既記の如く、特に我が部落の如きは一棟も残らなかったので、私は、大震災には必ず倒潰するものとの考えは捨てきれない。只最近の建築法は震災に対する工夫が種々なされるので、心強くは思っている次第ではあるが。

震災のために亡くなられた方の例を二三考えてみたい。或る家では主人が所用で不在、家では母子二人として昼食中の地震で、立って避難しようとして共に圧死。食事中の食卓の前ではそのまま座っても無事だったのに。次の例は当主の父親が子供と共に梁の下敷きになってしまった。助ける人が一人でその梁を鋸で切ったので屋根の重みが下って来て父親は遂に圧死。

曾我山から無数の小川が部落の中を流れてる。夏は子供等のよい遊び場である。偶々九月一日を迎えた。一人の子供が小川の岸の土手(昔だから石垣はから積)が崩れて足をもられてしまった。一緒に遊んでいた数人の子供等は力を合わせて手を引っぱ

たが助けられない。かくする中に一度は上流で水がせきとめられていたが、上から流れて来てたまった水が一度にどっと流れて来た。子供等は友を助けるのに懸命だったが一瞬ワツと逃げた。足をとられた子供は遂に溺死してしまった。

私の小学校尋常科一年生の弟は、近所の大人不在の家で大勢の子供等と遊んでいた。一度は屋外へ飛び出したが、家の上級生が「危ないから出ちゃ駄目だぞ」と云ったので、又家の中へ戻って来た、と同時に家が倒れて柱の下敷きになってしまった。他の子供等は一人の負傷者もなく無事だった。

大地震は近いと云われている。大地震があったら火災を出さずにかつ生命の安全を図る事が大切である。そのため非常の際の処置を常備心掛けて置くべきである。総ての運命は瞬間の判断に依る行動によって決せられ、しかもやり直しは絶対きかない。非常時の状況は単純ではない。私共はあらゆる状況を想定して対策を考えて置くべきではないだろうか。そして各種状況下の行動を訓練して身につけて置くべきである。頭で覚えた事は忘れるが、体で覚えた事は生涯忘れない。

やがて選手制度が取り入れられ、小学校間の対抗競技大会が催され小田原地方のスポーツ熱は一挙にたかまったのである。私がこの歳になっても画を描くことを愛し、文章を綴ることを生き甲斐にしているのも、震災直後の学校教育のお蔭と常思っているのである。

年配の人ならば大正十四

年一月に創刊された大衆娯楽雑誌「キング」を識っている筈である。それまでの古臭く陰気であった雑誌のイメージを一変させたこの雑誌には写真が多く、執筆者も菊地寛、吉川英治という今でもよく識られている作家が筆を執り、当時の大衆に大きな人気を博した。一方映画会も震災前の活動大写真からいわゆる映画となり、文学作品をテーマに

した作品が続々と作られ、坂東妻三郎らのいわゆる剣劇映画がこの時代から始まるのである。映画だけではない、日本に初めてのラジオ放送が始まったのは大正十四年七月である。ラジオの普及は社会の動きを家庭に運び入れ、日本人の知識教養を一挙に高めることになったのである。

このようにして震災を契機として日本のあらゆる分野に新風が吹きこみ、さまざまな新しい花々が咲き出したことは注目すべきことである。関東大震災の自然災害は南関東に限られたが、この災害が日本社会に与えたインパクトは関東地方だけでなく、やがては日本全域に波及して、日本歴史に新しいページを加えることになったのである。もちろん

ん震災のインパクトだけでなく、すでに時代転換の時期が到来していたことは言うまでもないが、関東大震災が、それまでの古いもの一切を消滅させ、その跡の新鮮な土壌に新しい文化を芽生えさせたことを忘れてはなるまい。

私は常に大正時代は大震災で終り、大正十三年、十四年は昭和の黎明期と位置づけている。関東大震災から昭和六年の満州事変勃発までの八年間は、短期間ではあるが、大正デモクラシー、大正ロマンチズムの最後の燃焼として興味深く、か



銀座のモダンガール

地震断想

南里 哲

大正大震災のとき、二歳十カ月であったが、そのとき、母親に手をひかれて裏から脱出すると、あたりの家は潰れていた、という記憶が残っているというのと、訝る人が多い。それは、親から聞かされた話が想い出につながっているのではないかという。

だが、私の同年輩の者に尋ねると、同じように断片的であるが記憶を持っている

つは自分自身がその中で、浮き沈みした体験者であるので、一度は何んとかまとめた文章にしたいと念願し

震災後のモガ風俗 ↓

東京家政女学校
自動車クラブ



ている。この関東大震災の記述はこれにて終りとするが、機会を得て又執筆したいと思っている。

る。それだけに刺戟が強烈だった訳だ。

全く記憶が断たれていて思い出が全くない。

もう一つ想い出が残っている。地震の翌朝、避難場所、一緒に避難した大人から貰った、冷たいサツマ芋が、とても美味しかったのを、味覚を通じて覚えて

その後、記憶が残るのは、小学校にあがる一、二年前のことだが、社会的関心を持ち始めるのは、小学校五年の頃だったと思う。曾我丘陵が禿だらけで、赤土が露出している箇所が点々としていた。子供心に、何故植林しないのかと不思議に思った事がある。今考えると大地震の際、崩壊した場所がそれで、すぐさま復旧出来なかった事情があったのである。

ほどの太さであったろう。間もなく、祖父が住職している南无柄の寺に、ある期間疎開していたと聞くが、

集団の地震対策

被災地中学校・高等学校の教訓

岡部 忠 夫

はじめに

各地の地震・各校の教訓

一 新潟地震

発生時刻 昭和三十九年六月十六日(火)午後零時二

分 規模 M七・七

震 度 五(新潟市)

震 源地 新潟市北方の海上、粟島付近の海底下四〇km

被 害 死者一九人 負傷者五一〇人 家屋全壊三五五七戸 同半壊一二、

二三七戸 流砂現象と呼ばれる砂泥の地下からの噴出で家屋の倒壊埋没が著しく被害が増大。

○新潟市立白新中学校の教訓

1 放送施設は電源が切れ

て使用できなかった。

2 防災本部の旗がなかったので応援旗で代用。散らばっていた生徒が旗の

下に集まってきた。

二 十勝沖地震

発生時刻 昭和四十三年五月十六日(木)午前九時四

九分 規模 M七・八

震 度 五(沢市)

震 源地 襟裳岬南々東一二〇kmの海底下四〇km

被 害 死者四九人 行方不明三人 負傷者三三〇人 家屋全壊六七三戸

同半壊三〇〇四戸 十三日から三日間降り続いた

一五〇ミリの大雨のため、表層ナダレのような現象

があり、崖崩れが多発。青森県では校舎が倒壊し

死者が出た小学校があった。

○青森県立三沢商業高等学校の教訓

死傷者なし 鉄筋校舎大破

1 地震時の対応

(1) 地震と感じた時から大揺れになるまでの時間 三〇秒から一分ぐ

らい。初めは立っていても感じない程度、生徒から地震といわれて初めて気がついた。次第に大揺れとなり、上下動も伴った。

(2) すぐ屋外に退避させたクラスがあったが、これは非常に危険である。一応机の下に潜らせ様子をすることが安全。教師が慌てると生徒に恐怖心を起こさせるから、沈着が必要。

(3) 女子生徒に恐怖のあまり泣き出す者がいるから大声を出して落ち着かせるようにすること。

(4) 揺れている間は絶対に廊下や屋外に退避させないこと。身体大きい生徒は頭だけでも机の下に隠させること。揺れのある間は天井から落下物(蛍光灯、コンクリート破損)があり、屋外に出ると最上階の外壁のカケラが落ちてき、また、正常の歩行ができない。

(5) 小さな揺れを感じた時は、机の下に潜りこむべき心の準備をさせておいた方がよい。十勝沖地震では、小さな揺れがなくなると、安心した時、突如として大揺れがやってきた。

(6) 机・椅子の多少の移動があったが、教室の暖房用ラジエーターが倒れて、大窓危険であった。事務室や校長室にある金庫は移動するので注意が肝要である。

2 屋外への退避

(1) 授業中は担当の教師の判断で退避させる(上記諸注意を踏まえて)

(2) 休憩時は緊急放送か非常ベルで指令する。しかし、実際には、休憩時の退避はどのようにしてよいか未だに自信がない。避難訓練時に、よく言っているが……。

十勝沖地震では、配線が断線した。強震の場合には電気系統は使用できないものと考えておいてよい。ハンドマイク、携帯ラジオを準備しておくべきである。

(3) 一階にいる生徒は、

- (1) 揺れが終ると同時に窓から退避する(女子は男子が助ける)。昇降口に近い教室はそこから。
- (2) 二階以上の教室は、予め指示をしてある避難経路によって行動をする(女子を先頭に)。
- (3) 非常階段を利用するのは非常に危険である。市内小学校の三階から二、一階にかけて、鉄筋コンクリート非常階段は全部落ちてしまった。
- (4) 避難袋は役に立たない。
- (5) 避難経路は、普段から職員、生徒に徹底させておくこと。
- (6) 職員のスリッパは、いざというとき役に立たず、かえって邪魔になる。火災が発生すれば特にそうである。

3

屋外への退避後から生徒の下校まで

- (1) 避難後、女子生徒には、恐怖のあまり腰を抜かした状態になる者もいるので、大きな声か、平手ビンタで気合を入れる必要がある。教師が不安な表情をすると、生徒はすぐに不安にかられる。
- (2) 本部をつくる。そのため係は、目印となる旗かなにかを立てて、その場所を明示する。
- (3) 整列後、担任は人員を確保し、異常の有無を本部に報告する。このため、朝のホームルーム等で欠席・早退、保健室利用の生徒を把握していなければならぬ。
- (4) 情報蒐集は携帯ラジオを利用する(当初は放送局も被害状況は分からない)。
- (5) 情報にもとづいて生徒を下校させる(十勝沖地震では、電話は不通になり、鉄道は止まったが、道路は確保されていたので、バス五台をチャーターして帰宅させた)。
- (6) 教室に残して置いた教科書は、余震が頻りにあるので、そのままにして置いた方がよい。
- (7) 翌日からの日課については、下校時帰りの足が確保できる生徒は登校するよう指示を与え、他は自宅待機させた(それでも大部分の生徒は登校してきた)。

安にかられる。

- (1) 倒壊した校舎は、増築鉄筋三階建て、強い震動と共に物凄い音響を伴って亀裂が始まり、三階の生徒は椅子に座ったまま一方に押し出されたような状態になった。最初の強震によって校舎はダウン。その建築技術的理由は分からない。地盤は沈下していなかった。
- (2) 外部から倒壊の状況を見ていた教師の話によると、三分間ぐらいで、ゆっくり傾斜を始めたという。内部の生徒は揺れが終った段階で新旧校舎間の亀裂をまたいで避難をした。
- (3) 体育館の鉄骨は折れなかったが、鉄骨のズレ、天井のテックスが何箇所からも落ちて来て危険で、以後体育館は使用させなかった。当日は体育館での授業はなかったが、怪我人はなかったが、授業中、強震があった場合はどうするか、現在でも課題の一つになっている。学校ではないが、

4

校舎の倒壊状況について

- (1) 市内の公民館の屋根が一部落ちたと聞いている。
- (2) 鉄筋校舎は安全度が高いと言われているが、過信は禁物だと思つ。他の高校での木造校舎の倒壊はなかった。
- (3) その他
- (4) 理科室の薬品保管は、床下に砂を入れ保管庫を造り、その中に入れて置くようにしている。当時、薬品が落下混合して火災が発生した。
- (5) 授業再開は一週間後、但し各学年三時間の授業。三週間後三年が平常授業となったが、一、二年生は三時間の交替授業が行われた。

三 伊豆大島沖地震

発生時刻 昭和五十三年一月十四日(土)午後零時二十四分
規模 M7
震度 五(大島、横浜)、四(伊豆半島一帯)
被害 死者二五人 重軽傷者二〇五人 家屋全壊九六戸 半壊一部破損四、七八六戸
山崩れ、崖崩れ多く、道

路、鉄道が切断。身体に感ずる余震一一八回に及ぶ。

○静岡県立箱取高等学校の教訓

- (1) 死傷者なし。校舎一部破損。運動場崖崩れ石垣崩壊。
- (2) 教頭は、これは大きいと、生徒に教室待機を命じたが、職員室へ駆けつけると、学校長は生徒の避難誘導を命じていた。咄嗟の判断は難かしく、校長と教頭の指示は異っていたが、一人の死傷者もなく、幸であった。
- (3) 災害発生と同時に停電、大声による指令しか下せなかった。携帯マイクが有用である。
- (4) 避難場所の決定は常識的判断によることなく、被害状況の速やかな把握が必要。避難場所と予め定めていた運動場が崖崩れで使用不可能となったので、急遽玄関前広場に変更した。
- (5) 落ち着きある明快な指示が、生徒の動揺を生じさせないために必要である。例えば、

「落ちついて…。静かに…。体育館前に…」と、いった短い指示がよい。

(5) 生徒は咄嗟に机の下に潜り込み、退避行動は「静かに、慌てず、速やかに」行われたが、年二回の避難訓練が大いに役立ったと思われる。

(6) 集合点呼の人員報告は、担任↓学年主任↓生徒課長のルートが、直接教頭への連絡に変わった例もある。

※ 人員の報告系統を簡素化し、各担任が直接、本部へ報告したのがよいという意見もある(京都市の例)。

(7) 主震後、たびたびの余震を警戒しながら、校舎内外の被害状況の調査、理科準備室発火の有無の点検、生徒の脱出避難状況の把握に専念した。

(8) 校舎内外の道路の亀裂が大きく、直ちに看板を出して危険防止策を講じたが、校地周囲の検分はおろそかにできない。

(9) 生徒の帰宅方法を考えようとしても、電話が使用できず、情報の入手に非常に困った。被災の際の連絡網はできていても、その連絡手段をどうしてよいか問題がある。自家発電装置無線電話の設置が望まれる。情報の入手、連絡には、自転車、モーターバイクが有用である。

(10) 学校に宿泊させなければならぬ生徒を、寝具不足のため、被災地の親戚、友人宅に宿泊を依頼したが、これはすべきでないと感じた。依頼先も避難するため所在を確かめ得なかった。明確な情報が入る迄は、生徒を学校の管理下に置くべきである。学校に生活館、宿泊施設があったらと痛感した。

(11) 余震が続き校舎内では宿泊できず、校庭で寒い一夜を過ごした。

※ 天幕の準備が必要と思われ、病人や虚弱な児童・生徒のために。

(12) 転倒防止について

省略(現在その点配慮が充分なまされていると思われるので)

四 宮城県沖地震

発生時刻 昭和五十三年六月十二日(月)午後五時十四分

規模 M7.4

震度 五(仙台、福島、水戸)

震源地 宮城県金華山沖海底下四〇キロ 主要動の継続時間二〇秒

被害 死者二七人 重軽傷者一〇、九六二人 家屋全壊一、三三七戸 半壊六、二二三戸

死者のうち一九名はブロック塀、門柱の倒壊圧死による。都市型災害のタイプといわれているが、沖積平野の軟弱な地盤の地域と丘陵地帯に新たに造成された地域に被害が多発。学校の建物では泉高校、凶南高校の二校で

鉄筋コンクリート柱がせん断破壊を受け校舎が大破している。

○宮城県立泉高等学校の教訓

死傷者なし(放課後)。仙台市のベッタウ

ンとして、郊外の丘陵地帯に発展した泉市に、昭和四八年に開校。

1 地震時の対応

(1) 教室 天井から蛍光灯が落ち窓ガラスが割れる。机の下に潜らせることが必要。教室内の戸棚、清掃用具入れロッカーを固定する工夫が必要。

(2) 特別教室 できるだけ教室中央部の机の下に潜るように指導するのがよい。薬品庫はすぐ開いてはならない。ピアノは足が弱いので近づいてはならない。

(3) 体育館 窓ガラスの破損で危険が多く、鉄骨をしめているプレスが切れた。できるだけ中央部に集るよう指導するのがよい。

※ 中央部に集るよう指導するのがよいかどうか疑問である。青森県立三沢商業高校の例にもあるように、体育館の構造によって異なるのではなからうか。

(4) 屋外 建物やバックネットから離れるよう

に指導が必要。(5) 避難通路 階段のつけ根は構造的に弱いで、避難する際、注意が必要。

2 地震後の対応

(1) 夜間、校舎内外を巡回のために、懐中電灯(少くとも2個)を職員室に常備しておくべきである。

(2) 被害破損箇所の大きな所を写真撮影しておいたことが後日大いに役立った。(破壊の構造的理由調査などに)。

(3) 断水、停電があり、校内放送はできず、電話は不通で、非常に不便であったので、その対応を考えておく必要がある。

(4) 校舎通路の安全確認と、その表示を大きく明確にしておく必要がある。

3 復旧工事の折の対応

(1) 設計者、工事施行業者とその下請業者の連絡を徹底して行うこと(一週間ごとの工事日程会議などを通じて)。

(2) 授業時数確保のため、騒音を伴う工事は、放課後か日曜日に実施す

- るよう日程を組んでもらうこと。
- (3) 各教室の戸には、工事前、その所属する部屋名や記号をつけておくこと。戸は規格品で合うが、鍵が導つので、工事完了後その組合せに日数がかかった。
- (4) 各分掌ごとの日誌を記入することを忘れずらう。
- 4 その他
- (1) ガス管の本管は何処にあるか知っておく必要がある。また、元栓を締めるハンドルを置いてある場所を誰にも分かるように明示しておくべきである。

今すぐ！

大地震を迎え討つ準備を

山村 武彦

昨年から今年にかけて大地震が続発した。釧路沖地震(平成五年一月十五日)、北海道南西沖地震(同七月十二日)、グアム島地震(同八月八日)、インド地震(同九月三十日)、そして今年一月十七日のロサンゼルス地震。それぞれに大きな被害を出し、いまだにその傷跡は癒えていない。

過去三十五年間こうした災害現場を調査してきて、事前に予知された地震がひとつも無い事に驚く。

ある日突然大地を揺さぶり、人々を恐怖のどん底に

陥れ数十秒で数万人もの生命を奪うのである。

地震は世界中どこでも起きているのではなく、全体の八十%は環太平洋とアジアで発生している。

中でも日本とカリフォルニアで頻発している為、両国共地震発生メカニズムと予知の研究に余念がない。しかし本当に予知できるようになるにはまだ百年はかかる。と私は見ている。ともかく世界有数の地震国日本の中で、最も危険地域のひとつと考えられているのが小田原である。

- (2) 家庭で事故にあった場合は必ず学校に連絡するよう指導をしておくこと(無届欠席が続き、連絡で始めて判明した例があった)。
- 仙台市立函南高等学校の教訓
- 定時制独立校。死傷

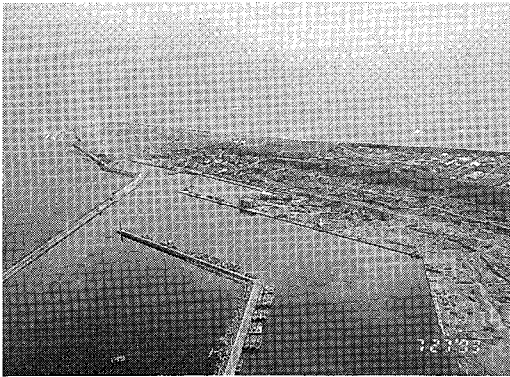
今、小田原周辺で起きると思われている地震は四つある。

- ①駿河湾を震源とする「東海地震」、マグニチュード(以下M)八・〇以上。
- 関東大震災がM七・九だったのでそれを上まわると予想される。
- ②小田原周辺を震源とする「神奈川県西部地震」、浅い所で起きる「直下型」の地震でM六・五以上と予想される。昨年五月、神奈川県が発表した被害想定では、冬の平日午後五時にこの地震が襲うと……小田原を中心として死傷者七千人、建物の被害八万棟としている。火災は一一五件発生し、延焼火災は四十一件。
- 津波は約四米の高さで数分後に襲ってくる事になっている。(次ページへ)

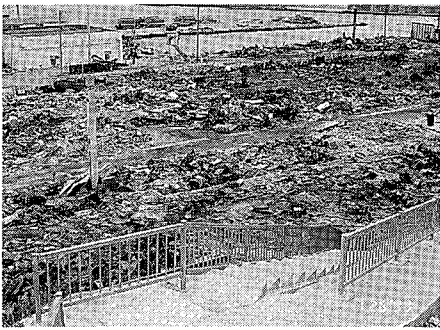
- 者なし。中間考査の第一日目、生徒の多くは給食室に、あとは図書室及び教室に何名かいた。沖積地の軟弱な地盤に立地。校舎は大破したが、運動場を共有する中学校には被害が全くなかった。
- (1) 何等かの形で生徒と教師のコンタクトが間髪入れず行われるべきである。生徒が直接教師の掌握下にならない時間帯で、教室や図書室にいた生徒の中には、茫然自失立ち竦んだり、かがみこんだままの者がおり、身を挺して各部屋を捜し廻った教師のかけ声に、始めて、我に戻って避難をした。
- (2) 教師自身が自信をもって対応し得るために、地震に関する基礎知識の学習と、校舎の構造特に防災上のウィークポイントを熟知することが必要である。
- (3) 避難に当って、多くの生徒が、廊下、階段、昇降口を非常に狭く感じており(アンケート実施により判明)、その箇所では倒れにあって、死傷者が出ないような、普段の指導が必要である。
- (4) 教師特に学級担任は、常時その日その時の在校生徒数を把握しておくべきである。
- (5) 本校での体験、特に生徒の動き等から判断して、パニック抑止のチャンスは最初の五分間で、その折、教師の生徒指導、掌握の力量と教師生徒相互の信頼感が集約し、浮き彫りにされるのではないかと思われる。
- (6) 家庭や職場が気になり、教師に連絡せず帰宅した生徒がいた。また、持ち物を取りに教室に戻った生徒がいたが、日頃の指導が必要であると思った。
- (7) 地震による死傷者はいなかったのに、復旧の折、物品の取りはずし中に、脚立が倒れて転落、骨折の重傷を負った職員がいたが、復旧後の事故防止も徹底しておく必要がある。

(了)

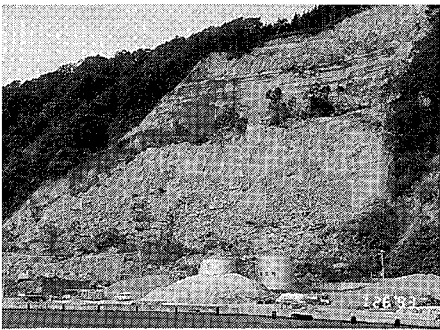
1993・7・12 北海道西沖地震(筆者撮影)



津波と火災にみまわれた
奥尻島青苗岬



青苗地区 津波・火災の跡
この階段を逃げた人は助かった



洋々荘の裏山が崩れ
27人が生き埋め



津波で破壊された
大成町の堤防

③伊豆大島と房総半島沖を震源とする「関東房総沖地震」、元禄大地震の再来ともいわれM七・〇以上。

④東京湾の奥を震源とする「首都圏直下型地震」、M七・〇以上。

特に切迫していると考えられているのは、東海大地震と神奈川西部地震である。

小田原の歴史は地震の歴史でもある。寛永十年(二六三)の地震から、元禄・天明・嘉永・関東大震災と、その間隔はほぼ七十年〜七十九年の間に大地震は襲っている。

これは地球を覆っている

プレート動き(地球規模の対流)が規則正しくストレスを貯めているからと考えられる。

大正十二年(二九三)の関東大震災から今年で七十一

年目、いつ起きても不思議がないと言われる大地震に一般家庭では何を備えるのかを述べてみる。

一 自分の家の安全確保

現在の日本の建築基準法で建てられた家は、余程地盤が悪くない限り、一瞬でつぶれるという事はない。

しかし、ガラスの飛散、家具の落下、転倒で怪我をしたり、火災が発生しても近寄れず消火ができない等という事

が起きる。そこで我家の安全確保の三要素として……

①ガスもれ対策・初期消火対策

②ガラス飛散防止対策

③家具・電化製品の転倒落下防止策

①はガス洩れ自動遮断器を取り付けたり、プロパンガスボンベのチェーンの二重固定。消火器の補充外。

②はガラス飛散防止フィルムを貼る事。ロサンゼルスで省エネ用に貼ってあったガラスフィルムが大変な威力を発揮したのをみてきた。ガラスを凶器にしない為、道路に面した商店のビル、マンション等も急ぎ対策を迫られている。

③家具や電化製品は少し

二 備蓄三原則

人間をかければ固定ができる。家族を怪我をさせないように、家や職場ですぐ実施して欲しい事である。

災害が発生した時あなたはどうしますか、と聞きたいのの人が避難場所へ避難しますと答える。これは間違った思い込みである。避難命令や避難勧告を受けた人、又は災害や津波、崖崩れ等の危険が迫っている人だけが避難するのである。それ以外の人は自分の家で過ぎなくてはならないのだ。市民全員を収容できる場所はどこにも無い。だから自分の家を安全シェルターにしなければならぬのだ。

①非常用食糧 もはや、カンパンの時代は終わった。アルファ化米非常食(水を注ぐだけでごはんができる)缶詰め粉ミルクなど家族構成に合わせ五日分を備蓄したい。

②非常用飲料水 一人三日で五日分は用意したい。これは三年間もつ保存水などが良い。

③非常用トイレ 水道が止まってまず困るのがトイレ、折りたたみトイレが便利である。

そのほかヘルメットや医療品、ビニールシート等備えたいものがたくさんある。防災対策等もっと詳しく知りたい方は、七月に発刊した拙著『大地震その時どうする』(五月書房)をお読み下されば幸甚である。

ともあれ百分米襲るといわれる大地震を、迎え討つ準備は自分で行わなければならない。自分と家族として自分の街を守るのは行政ではなく、自分自身なのだから……。

(防災アドバイザー)

小田原叢談(六)

石井富之助

一文菓子屋と物売り屋

むかしの子供の遊びは、こま、たこ、めんこ、お手玉、手まり、あやとり、折紙など、その遊び道具はみんな簡単なものはかりであった。それでいて鶴塚鹿々子さんの句に

いっしかに冬の遊びの

女の子

というのがあるように季節感もあったし、それぞれに味もあった。

戸外の遊び場も方々にあった。わたしなどは北条氏政、氏照の墓のあった永久寺、今は谷津に移転している一の境内や駅裏の愛宕山でよく戦争ごっこをやったり、辻村農園にも時々行ってぐるぐるかけずりまわったりしたものであった。

永久寺へは裏町の元志沢デパートの横の道を登って行く。草ぼうぼうとした細い道で、このあたりは木や

竹やぶが生い繁っていた。今ではこの岡はあとかたもなく削りとられ、商店、住宅で埋めつくされてしまった。わたしは氏政、氏照の墓の前を通ると、いつもむかしの姿をなつかしく思い出すのである。

もう一つ子供の遊びに関

連してなつかしく思い出すものに一文菓子屋と物売り屋がある。一文菓子屋にしても物売り屋にしても本来は菓子その他を売るのが商売なのだが、子供たちの方からみればいい遊び場所であったり、遊び相手であった。大正時代の子供の遊びという面からみると、これも落とすわけには行かないようである。

大正時代に一文菓子屋はあちこちにあったが、わたしの家の筋向こうにも一軒あった。間口二間半(四メー

トル余)ばかりの店で、まんなかに裏へ抜ける通路があった、その左側はおじいさんのやっていた釣り道具の店、右側がおばあさんの受け持ちの一文菓子屋になっていた。

店の一番前に駄菓子の箱が並んでいて、上のガラスぶたをとおして、三角のハッカ、ネジリン棒、オコシ、豆板などが見える。そのうしろの少し高い台の上には、黒砂糖のテッポ玉や金平糖、塩せんべいを入れたびんが並んでいた。風車やデンデン太鼓、メンコのような安いおもちゃもあったし、正月にはこまやかると、すごろく、羽子板なども売っていた。

わたしは毎日のようにこへ遊びに行った。いや、わたしばかりでなく、ここは近所の子供の集り場所でもあり、遊び場所にもなっていたものである。みんな一銭ずつおこずかいをもちうと、ここのガラス箱にのしかかるようにして、今日は何れにしようかと品定めをしたのち、ガラス板の上から指でさし、「これおくれ」という。おばあさんがとってくれると、そのまん

ま店先にずらりと腰をかけたペチャペチャやりだす。店のじやまになりはしませんかかって。いやどうしてどうして、子供たちはいいお得意さんなんだから、そんなこというわけはない。その上、おばあさんだって子供たちと遊ぶのがきつと楽しかったのだらうと思う。ろくに遊び場のない今の子供たちと比べたらずっと幸福だったのじゃないかしら。そのころ、一文菓子屋にはどこにも「ひっぺがし」というのがあった。

一枚の安物のボール紙のまんなかに十の絵が印刷されていて、あるものは桃太郎や金太郎などのおとぎばなしであったり、あるものは武者絵であったり、またあるものは動物であったり、いろいろあった。ともかくちがった絵が十かいてあるのである。そして、その両側にはそれぞれ三側ずつ、小さい紙のくるくる巻いたものが、青や赤の帯ではりつけてある。一銭はらってその小さい紙をひっぺがす。だから「ひっぺがし」というのだが、紙の中にはまんなかの絵のどれかと同じものが印刷されていて、これ

で一等、二等、三等と賞品がもらえる仕掛けになっていた。賞品はみんなキンカ糖で、一等にあたると二十センチぐらいの大きなたいがもらえた。

このたいをとりたいたばかりに毎日ひっぺがしをやりに行く。やっているうちに子供は子供なりに考える。一等は一番高い賞品を出すのだから、ひっぺがしを作る人もきつとていねいに紙を巻き、ていねいにはるにちがいないというふうにある。

こうなると、一本一本を注意深く観察する。そして、一番ていねいなのをねらってひっぺがす。不思議なものでこれがまたよく当たった。みごとに的中すると、鬼の首でもとったように喜んだものである。ところがそのうちにこれがちつとも当たらなくなる。すると子供たちは帯の上に顔だけ出しているのに目をつける。これも結構確率が高かった。まさに虚々実々で、子供たちはどこの人か知らない「ひっぺがし」作りのおじいさんに勝負をいどむことに、一種独特のスリルを味わっているみたいであった。

子供たちをお得意さんにして商売していたのは一文菓子屋だけでなく、町を流して売り歩く、しんこや、あめや、おでんや、豆屋などいろいろあった。

小学校から家へ帰ってき少したつとしんこやがやってくる。来る時間が毎日判で押したようにきまつているので、子供たちはもう集まっただけで屋台車がとまるまわるとそれをとりかこみ、それぞれうさぎ、とり、もも、みかんなどと注文を出す。

しんこやのおじさんにはここに笑いながら一々うなずき、ふきんで台の上をふいてから引き出しをあける。引き出しのまんなかにはふきんでくるんだ白い大きなしんこの塊が入っていて、その手前に赤、黄、青と食用色素で色をつけたしんこが並んでいる。

おじさんはまず白色のしんこを適当にちぎってこね、その中に砂糖を入れる。赤と黄のしんこをこねあわせてだいたい色を作ると、いつものことだからそれがみかんだなとすぐわかる。しかし、幾度見てもおもしろいからおじさんの指先をジッ

と見つめる。おじさんはいだいの色を少しつまんで平たくのばし、白い方の肩のところへつける。これはあとで皮をむいた時に身になるところである。それからさらにだいたい色ののをばして全部をくるみ、指を動かすとみごとに形ができる。そのまわりをささらでたたき、肩の皮をむいてはさみの背で中身をつけるとでき上り。それを経木の上のせてくれるのである。

つぎはにわとり、つぎはねこ、そのつぎはいぬと指先からいろいろなものが生まれてくる。それを子供たちはまるで魔術にでもかかったように見とれていた。

わたしの順番がまわってくると、おじさんは心得顔に「水道だね」という。しんこの味付けには「五色あって、一つは中に砂糖を入れるもの、もう一つは寄せなべやそばなどを作った時に黒蜜をかけるのであるが、それがともうまいのでわたしはもっぱら寄せなべを作ってもらっていた。ところがある時おじさんは水道というのをはじめてつくった。水道せんとバケツだから形としては一番簡単

でちっともおもしろくないのだが、水道せんの中にいっぱい黒蜜が入る。これが魅力で、わたしはそれから水道ばかり作ってもらっていた。

子供たちはたいてい一銭であつたが、たまにおとながおもしろがって十銭も出さうものなら、それこそみごとな大だいをこしらえて子供たちの目を見張らしたもので、そのほかに寄せなべ、すしなども実に克明にその姿を表現してみせた。

なにも作らないしんこだけも売っていた。これを「ただしんこ」といった。粘土細工をやるように、おじさんに教えてもらいながら作ってみるのがどうも巧いかな。結局手あかだしんこがまっ黒になって



カット 内田美枝子

しまうこともあった。

小学校を卒業して中学校、大学と進んでも、しんこやと同じように同じ場所をやってきた。自分より背の高くなつたわたしをみて、「お立派におんななすって」と声をかけてくれた。

しんこやと相前後してあめやがやってくる。

円いひらべつたいたらいの丸の旗をさしたものを、手ばなしで頭の上のせ、太鼓をデデンデンとたたきながら町を流して行く、あのあめやである。これは渡り者だったからであろうか、特別に子供たちと仲よくなるとうとうふうもなくな、子供たちの方もあまり買ひもしなかつた。ただよく手ばなしで頭の上のせ

て歩けるものだと感心しながら、調子よく腰をふって行く、そのうしろ姿を見送ったものである。

いつだったか、東宝劇場の演劇人祭りの時、茨城県だったか、二人のおばあさんのあめや踊りが出た。むかしそのままのものがまだ残っているのだなあ、しみじみした気持ちになった。

あめやにもいろいろあつて、屋台の鉄板の上に、汽車、飛行機、動物などの型をおき、その中へあめを流し入れて形をつくる。そういうあめやもやってきました。これは一度見てしまつたとはいっても同じなので、子供たちの興味をつなぎとめることはできなかったようである。

これに比べると、もう一人のあめやの方は結構喜ばれた。ストローにあめのもとをつけて、口で静かに息を吹き込みながら、手早く鳥やいぬ、ねこなどの形をつくり、それに絵の具で彩色する。

手さばきが早くみごとで、おもしろい見ものであったから、大勢子供たちを集めるには集めたが、買うものはそうたくさんはいなかつた。

た。

もう一つ印象に残っているものにおでんやがある。「おでんや、でこでこでんちゃんや。」

透きとおったいい声であった。

たしか一銭に二本だったと思う。細長の三角に切つて、くしにさしたこんにゃくが大きなべに入っていて、お金を出すと、「でこ

でこでんちゃんや、ほら甘いやお。」といいながら甘味噌をこつてりつけてくれる。

子供たちは一本を左手に持ち、右手のを横かじりにする。口よりはるかに大きいので、当然口のまわりは味噌だらけ、それをまた舌でペロペロなめていたのが、今でも目に見えるようである。

これは普通の味噌おでんだからおとなも大きなざらを持って買いくる。多分お八つなどに適当だったからであろう。

まだこのほかに豆屋がチリンチリンと鈴を鳴らしながら売りにきた。この豆屋は竹の花に店を持っていて、豆類、つくだに、漬物類を売っているのだが、こうして外売りにも出ていた。

箱型の車のうしろの戸を開くと引き出しがいくつもあり、そこに煮豆や漬物が区分けして入れてあって、なかなか小ぎれいにできていた。

重宝なのでこの家でもお惣菜の足しに買っていたが、子供たちは子供たちでこの豆をよく買って食べたものである。うずら豆、青豆、黒豆、

谷津

(小田原市城山 一―二丁目) に

華嶽城址が

谷津に華嶽城址があったと『大日本国誌』に載っているので紹介しておきたい。

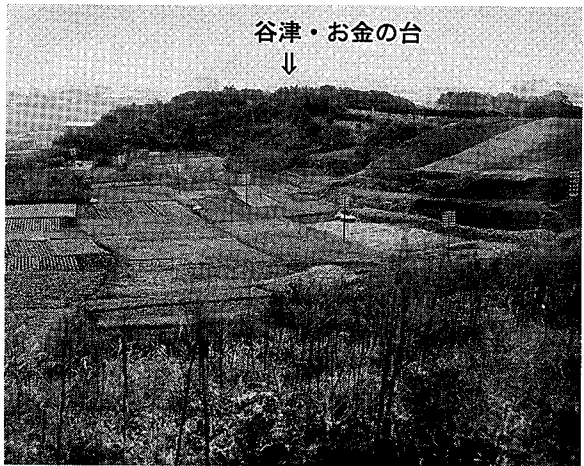
華嶽城址

足柄下郡谷津村小峯山ニアリ山下字城下ニ城源寺アリ亦郭内ニ屬セシト云北條氏小田原城ヲ築クニ及ヒ其外構トナリ城堀ノ状ヲ詳カニセス應永二十三年丙申十月足利持氏上杉氏憲ノ為ニ鎌倉ヲ襲ハレ奔リテ駿河ニ至リ大森藤頼式部大輔。諸本以テ藤頼ノ父頼頼トナス大森系圖ニ拠ルニ頼頼信濃守ト稱シ藤頼式部大輔ト稱ス大草紙等式部大

輔ト記スル者藤頼ヲ斥スナリ且年時ヲ以テ推スニ藤頼トナス者得タリト為スニ依リ同廿四年丁酉正月乱平ラキ持氏藤頼ノ功ヲ賞シテ土肥土屋氏ノ故地ヲ與ヘ小田原ニ居ラシム大草紙藤頼乃チ城ヲ此ニ築キ之ニ居ル小田原ニ城ヲ築キ華嶽城ト云今谷津村福荷ノ脇ニ城跡アリ今ノ城ハ北條築立タル城ナリ今茲窪村ト華嶽山城源寺ト云ハ此城ノ結構ノ跡ナリ蓋シ小田原ノ接壤ナレハ概シテ小田原ト稱セシナリ數傳ノ後氏頼ノ二子藤頼信濃ノ二至リ明應四年乙卯二月十六日北條長氏

詐リテ箱根山ニ獵スト稱シ兵ヲ潜メテ来リ襲フ藤頼兵少ナク事急ニシテ戦フ能ハズ大住郡真田城ニ走り城遂ニ陥ル 小田原記

大正末撮影(尾崎正氏所蔵)



谷津・お金の台

「お金の台」の場所を指すものと考えられる。註 城堀 城の内部と外部との間の空地

あずきなどすべて汁気がなく乾いているので、指でつまんで食べてもよれない。それを雑誌のページを、はすかいに折ってはりつけた三角の袋に入れてくれるのである。

子供の間にはこんな物売りが毎日きまってやってきた。それを一銭ずつもらつては買って食べるのが楽しい日課になっていた。

ろくに手も洗わずにこねまわしたしんこ細工、口でふくらましたあめ、雑誌の袋に入れた豆、今から考えればどれもこれも非衛生的なものばかり。それでいてこのしんこ、あめ、豆を食べるチブスになったり、エキリになったりした例は一度も聞かなかった。そして、わたしたちは楽しかったそのころの印象をいまだに忘れないでいるのだから、まことに奇妙である。これらの物売りはだいたいの関東大震災を境にして次第に消えていった。(続)

材木屋綺談 その壱



たかた・きくせん

お酒に
「白鹿」
「日本盛」
の銘柄が
あるよう
に、杉銘
木にも種々
のブラン
ドがある。
銘木とは
天井板や
床廻り材
に使用す
る美麗な
化粧材原
木のこと
を言う。
杉銘木は
主としてその産地によって
ランクされる。いづれも樹
齢二百年以上を経たもので

杉銘木の ブランドあれこれ

ないと言えない。
巷間で最もよく知られて
いるのは秋田杉である。銘
木秋田杉は秋田県の国有林
から産出される。江戸時代
から佐竹藩が厳しい伐採禁
止のもとに育ててきた樹齢
三百年以上の上質材である。

いるのは吉野杉である。こ
れは奈良県吉野地方に産し、
色も秋田杉同様美しい薄桃
色をしている。しかし秋田
杉のような大口径のもの
はない。従って天井板用より
柱材に製材されるのがほと
んどである。

ように樹齢七千年と言われ
て国宝級の天然木になって
いることは、木材に関係の
ない人々でも今ではよく知っ
ている。
目下日本の建築木材の七
五％は外国材であって、素
人の方が美しいと思うもの
のほとんどは、スライスし
てベニヤ板に貼ったものか、
中には写真印刷技術による
似非天井板が横行している
ことは、永年ホンモノの杉
銘木を扱ってきた筆者にとっ
て嘆かわしいの一語につき
るのである。

色は薄桃色をしていて癖が
なく、天井板の柱目にして
も板目にしても万人向きの
化粧材である。しかし永年
の伐採でこんにちでは全く
の稀少材となってしまうた。
秋田杉の外でよく知られて

おなじ奈良県でも春日神
社神域の山から産するもの
は春日杉と称し、色も美麗
大口径のものが多く、何
分にも分量が少ない。伊勢
神宮神域産の杉銘木も「深
山杉」として名が高く、又、
九州霧島神宮神域のものも
同様に稀少原木となってい
るので、こんにちではスラ
イスしてベニヤ板に貼って
製品としている。

杉銘木は他県に行かずと
も、県内の神社仏閣の古い
樹齢のものは皆、銘木と言
える。たとえば南足柄市大
雄山最乗寺参道の杉並木は、
戦前によく市場に出廻った。
いづれも樹齢三百年以上の
良質である。戦前には私も
たびたび取り扱ったが色は

濃い目の赤、油気が強く、
秋田杉と異り数年経っても
色が褪せず、美麗さわまり
ない。しかしこの優秀木も
かつての大戦中、軍用材の
名目で大量に伐採され、こ
んにちでは参道沿いのもの
だけになってしまった。あ
たら折角の優秀材を木造船
や塹壕用にしたことは何と
も勿体ない話である。
稀少銘木杉と言えば近頃
テレビでよくお目にかかる、
屋久島から産する「屋久杉」
がある。この杉は樹齢七
百年一千年のものもあり、
色が少し
褐色に近
いが、油
気のある
艶と言
い、
複雑美麗
な本目と
言い、杉
天井とし
ては最高
クラスに
属する。
しかしこ
れも今で
は市場に
出ること
は少ない。
屋久島の
縄紋杉の

折込み現代どどいつ

高井風喜洞

あ 秋のもみじも
さ さららの花も
く 暮れりやおんなじ
さ 酒の味

(NHK現代どどいつ作家)



道了尊産出杉天井板

虞愁記 ④

シベリアから祖国に祈る

文と絵 藤野 明

筆者は、新京(現長春)の関東軍経理学校で主計将校要員集合教育を受けていたところ、ソ連軍の侵攻により、東満国境虎林の師団司令部から無線で原隊復帰を命じられ、逸やる気持で列車に乗り込んだ。が、ハルビンで運行停止。止むなく大勢の兵隊と共に敦化に向かったが、敗戦の噂もあり投降を余儀なくされた。そして、牡丹江に集合させられ、一団となってソ連に連行される。

きび畑の憩い

満洲徘徊
昭和二十年秋気



夕陽は既に丘の彼方に落ちたか、闇い幕が這って居た。深み行く寒さに身を刺されながら、夜露で顔を洗い、或いは、薄氷を割り水を掬い、小枝を求めて暖をとる、労軀を草枕に託す。

冷気に起こされ、仰げば北斗は鎌を低く振り下ろし、生なく動なき枯野に北風渡り、冷気大地を覆う。己れ独り荒野の果てに放り出され、露を凌ぐものとしてなく、仮寝に微睡む身の哀れさを誰ぞ知るや、母は如何に在

わすや。思案は旅愁となり、望郷の念、病となりて胸に寂し、夜鳥の一声が、深み行く故郷の夢と共に闇の彼方へ幻の様に消え去った。

湖水廻り

満洲彷徨し再び東北へ
昭和二十年秋肌寒し

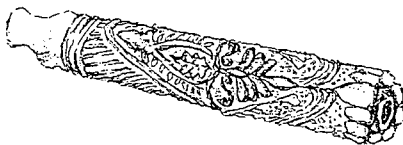
野と山との変転なき視界から抜け、我々を希望に満たせたもの、それは、湖畔なり、「鏡泊湖」(黒龍江省)なり。満々として山々の裾

ラーゲル 抑留所から持ち帰った品々

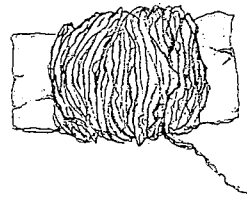
私が作った木のスプーン。いつもカーシャ(粥)を食べたスプーン。とくに白樺の匙は幹とそして枝で、できたところが傑作?小刀がなく、細工が難しい。



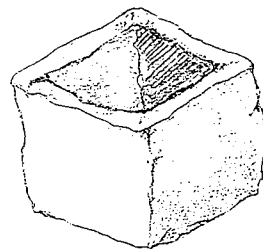
パイプは多数の人が作った。ナラの木を赤く熱した針金で穴をとおす。小刀がないからなにか細い金を持って彫刻をする。又、小さいかねで口を作る。煙突の煙で茶色をつける。タバコは配給してくれた。



私はスイス製の懐中時計を紙で包み、靴下の糸で又包む。ソ連ではどんな時計もなく見つかったらとられてしまう。



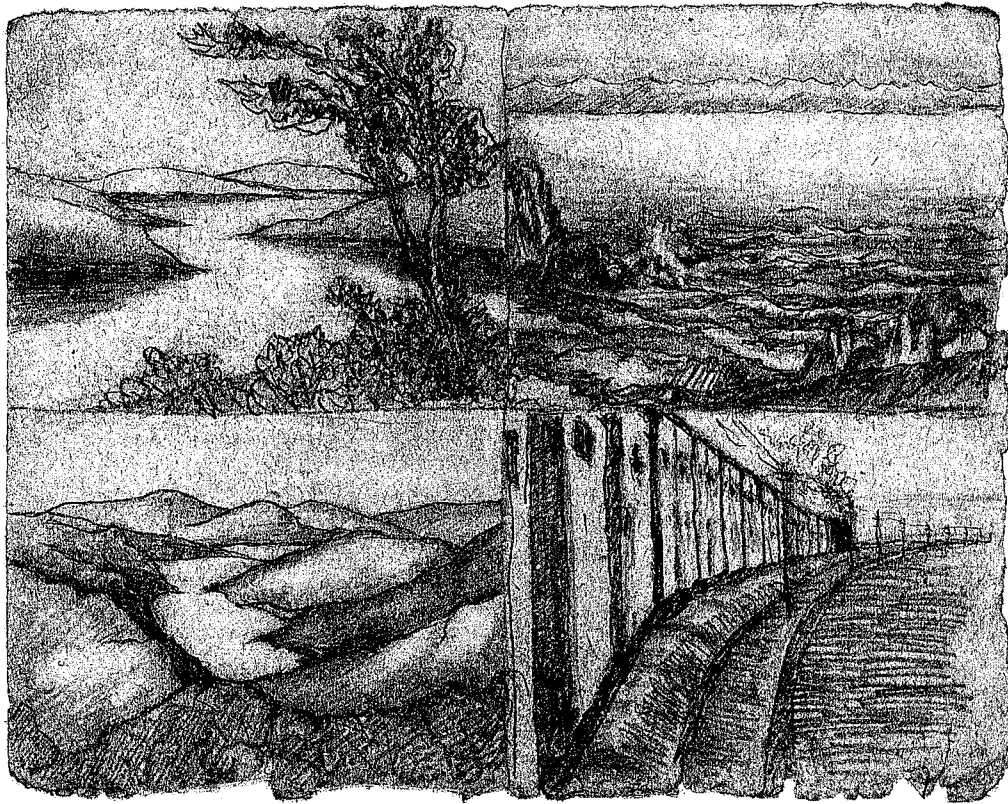
私は何とか原稿を全部、故郷へ持ちかえりたく、紙をカーシャ(粥)で貼り箱を作った。もし、ばれたら元の抑留所の労働者としてソ連へもどされる。



ラーゲルから持ち帰った連行される途中のスケッチ (1枚に4カット 原寸大)

湖水廻り (鏡泊湖)

バイカル湖 (世界一)



湖水廻り (鏡泊湖)

歎 喜 憂 心

に満つるは、蒼水なり。チカチカと刺す光は王冠の碧玉の輝きか、深み行く秋は、漂う紫雲の如く、金銀の綾織の如くに、湖水に山肌を写す。梢のささやきすらその展望は置物の如く静止そのものである。詩心句を口づさみ、画心は心の筆を運ぶ。楽しかるべき湖畔廻り。しかし、主なき捨小舟は乗せる情緒なき。

く朽ち果てて、さらに、道は凹凸激しく憎しみをかい悩みは尽きるを知らなかつた。かくして二百数十kmは越えて「掖河」に着いた。靴

底の穴は長途の行程を物語る様に大きく空いていた。ばらばらの部隊が大きくなっている。

もう、祖国へ帰れると皆元気で張り切っていた。ソ連のルート越境し南下、ウラジオへの噂の話。それも尤もらしい話であろう。

歎 喜 憂 心

昭和二十年晩秋 霜降

菊の佳節を期して、汽笛が鳴らされ、ピストンが廻り初めた。何と記念すべき歎喜の出発なるか、四十数輛の貨車それぞれストロブを抱き喜々として、経路を語り、郷土を、将来を語って居る事だろう。

雪の「掖河」を遠く、置き去りにして、行くゆく「綏陽」「綏星」、そして歌に知る国境の町、「東寧」「綏芬河」を過ぐる頃には、視野は逐次異国の風景に変わり、見極めの付かぬ中に、記念すべき国境を過ぎて居た。

ウラジオを過ぎて祖国に降り立つ日は、いつの日か、胸は躍る、血が逆行せんばかりの嬉しさは、爆笑となり、車中に漲って居る。

地図、羅針盤等の持ち込みを禁じられていた。だが我々は、進行、方位設定に絶えず注意を怠らなかつた。朝には、窓から射し込む日光により、夕べには北斗を求めて一喜一憂に心奪われて居た。

しかし、列車は次の日も、又次々日も南下しなかつた。一縷の望みを抱きながらも何時しか車中の空気は、悲観説に傾いて居た。昨日は北行、今日は西行とくるくる方位を変えて居た。話題は、話題を生み、デマとして飛んだ。喜びは何処へやら塩を打った様にボソボソ話に消えて行つた。ソ連の凡ては機関車のみ知るか出発の時、色々と聞かされた事の総べてはあざむかれていた。日本人のお芽出度さを、しみじみ思い知らされた。我もまた、お芽出度き人の一人なりとは……。

二十九日間なんとか、モスクワ東南四九五kmラーダ収容所へ。
デマだとは 知りつつ
根掘り 葉掘り聞き
(続)

紅蓮洞・坂本易徳 ⑱

岡部忠夫

二つの新聞記事から(2)

足柄県下景況

○県下小学校は追々盛大にて去月の大試験に上等小学卒業生二名(植田重敬・目良富有)出来せり。併し資金と良教師の乏しきには困却せり(郵便)……

「大試験」の意味については、「『学制』(明治五年(一八七二)八月公布)に「生徒等ヲ終ル時ハ大試験アリ」と定め、「小学校ヨリ中学ニ移リ、中学ヨリ大学ニ進ム等」の説明がつけられている。

以上は、前号の分の再掲であるが、以下、「足柄県下景況」のうち主だった短信を再び取り上げながら、それに関連したことに触れたい。

※ 明治五年の『学制』により小学校は、上等小学と下

等小学の二つに分けられていた。そして、下等小学は六歳より九歳までの間に、上等小学は十歳から十三歳迄に、それぞれ卒業させることになっていた。

それは、現在のような学年制ではなく、八級から一級迄の等級制度になっていて、進級するには、試験に合格することが必要であった。学力があると認められると、飛び級して修業期間の短縮が計られた。

北村透谷の実弟丸山古香は、飛び級で評判となったらしい(坂本易徳「故北村透谷」『小田原史談』第一五六号参照)。

『明治小田原町誌』を遺した片岡永左衛門は、明治六年(一八七三)九月「下等小学第八級第七級卒業候事」という修業証書を受けており、第八級から第六級に飛び級している(『小田原近代教育史資料編』第一巻巻頭写

真。

植田重敬・目良富有も、新しい小学校が開かれてから三、四年目で上等小学を卒業しているのを見ると、飛び級をしたのであろう。

二人はまた、小田原で初めて上等小学を卒業した人だ。このことを、坂本易徳は、『小田原の史実と伝説』第八輯(大正十一年九月発行)に「最初づくし」と題した文を寄せている。

小田原で初めて小学校を卒業した者は中新馬場(小田原市栄町四丁目九)の植田のまっちゃんと言われ、屋敷(小田原市本町二丁目三)の目良のひょうさんである。二人とも何か六ヶ敷い名乗りがあったのだが、それは忘れてしまつて、唯、かう、児童の時に呼んでゐたのを思ひ出したまま書いたので、併も、まっちゃんもひょうさんも共に其の本字さへ知らなかったのである。其の後、まっちゃんの方は、何處かの小学校の教師をして居たことを聞いてゐるが、今は其の消息を知らない。ひょうさんは、其の後東京に出

て、故文学博士重野安繹先生の塾で學んでゐるが、不幸、肺患に罹り、青年時に死んでしまった。

植田のまっちゃんも目良のひょうさんもニッケネームであろう。

そんな事を知っている坂本易徳は小学校と一緒に學んでいる訳だ。その学校は本源寺学校であろう。坂本易徳は、北村透谷と共にこの学校に通っていたと思われるからである。

その頃、小田原の小学校は、本源寺学校のほか、日新館、一丁田学校、西海子学校があり、その後も増設・分割・改称・統廃台が行われ、その沿革は複雑なものとなっている。

当時、小学校で学ぶことが出来たのは、旧藩士か、身代豊かな商家か、素封家の子弟に限られていた。

植田重敬、目良富有両名について、坂本易徳は「二人とも何か難しい名乗りがあった」と、旧藩士の子弟であるのをほめかしている。安政五年(一八二六)の小田原藩士の『順席帳』をみると、植田姓を名乗るのが四人いる。植田角助保義は

切米七石扶持三分で伊賀役(養者番)を勤めている。そしてまた、植田百治保徳が同じく伊賀役で五拾石を得ている。年齢は角助が一歳上である。血縁関係がありそうだが、どうもはっきりしない。

一方、剃髪して引退の植田蘇右衛門重業と近習を勤め三十石の植田弥三郎重方がある。二人の間は、名前に重を冠するところをみると親子関係があるようにみえる。すると、植田重敬は、重方の後を継いだのではないかと思われるのだが……。

一方、目良富有についてみると、富有が亡くなったのは、明治十三年(一八八〇)二月のことになる。彼の年齢は判らないが、坂本易徳の「最初づくし」からすれば、十代後半以降の青年前期かと思われる。

目良家では、早速、跡継ぎに、旧小田原藩士河合又助三男の恒を戸主として養子に迎えた。正確には富有が亡くなった五日後の二月十日の事になる。予め富有の生前、恒が養子となる事は決っていたのであろう。

恒の名は、河合又助の文久二年(一八三二)『御家中先

祖並親類書』に載っていない。彼が生まれたのは、その後の慶応元年(一八六五)五月だからである。

この事が判った切っ掛けは、目良家の菩提寺の円福寺住職木内雍明師の話からである。

「富有とは珍らしい名なので覚えていますよ。目良家では、富有の亡きあと、片浦方面の農家から、恒さんを養子として迎えたと聞いています」

維新後ならば、農家から旧藩士の家に養子に入ることとはあり得よう。と、思いながら、目良家の当主で、恒の孫に当る純さんにお尋ねしたところ、早速、恒の除籍原戸籍写しと、目良家累代位牌内蔵の書付写しを添えた丹念な返事を頂いた。

特に、祖父夫婦の結婚以前のことは詳しく伝わっていないので、お答え出来るが大変僅かであり、不確かなことになり、お詫び申し上げておきます。

取得ず、お尋ねについて判っておりますことを。(1)目良 恒の生家について

て(別紙戸籍記事写し参照)。慶応元年五月二十一日に小田原町の河合久助、ナカ夫妻の三男として生まれ、昭和十九年一月十日に、満七十八歳八ヶ月程で亡くなっており、中略…生家の河合家については、戸籍には当町(小田原町)とありますが、前大戦後も、父、篤の生前は、根府川の河合家(当時みかん山を経る)とは多少の交流が続いており、同じ様で、東京の麻布にも河合家がお住りだった様ですが、ご両家共に今では当主のお名前、ご住所が不明で、音信不通になっております。然し、河合家は今も根府川にお住まいの筈と考えております。

(2)、(3)は略

る。ただ、根府川の河合家というの、不明である。根府川に河合家は現存していないし、また、根府川・岩泉寺境内にある大正十一年の「大震災歿死者供養塔」に河合の姓はない。しかし、河合家が根府川と係わりのあったのは事実であろう。どのように解してよいだろうか？

※

目良恒について、紅蓮洞・坂本易徳は、前掲の「最初づくし」で次のように記している。

…我が小田原人で初めて、博士の学歴を得たのは、現今、神戸の川崎造船所に居る工学博士の目良恒吉氏だ。氏は、工科大学で造船学を学んだ工学士で、振り出しは海軍少技士である。

しかし、坂本は、「我が小田原人で…」と、郷土の誇りとする素朴な感情を持ち続けていた訳だ。

目良恒が帝国大学工科大学造船学科に入学したのは、明治二十一年(一八八八)九月、満二十一歳のときである。

坂本易徳は、この年の七月、慶応義塾正科(のちの予科)を卒業したが将来の目途は定まっていなかった。坂本の青春の彷徨は、そのまま情性となって持ちこたれ、生涯続くことになるのだが……。

一方、目良は、歩むべき進路をはっきりさせていた。案外、自分自身、理工系に向くということを悟っていたかも知れない。

彼の綿密さは親譲りとも思われる。目良は、海軍からイギリスに派遣されてからも、細ごました内容の便りを『函東会報告誌』を通じて、郷党の人に知らせている。目良の美父河合又助が藩に差出した「先祖書」は、同輩より詳細に記されていて長い。なにか、そこに共通点があるような感じがする。

それに、目良は、海軍依

託生となっている。学費を給されるのも、造船学科を選ぶ一つの条件だったかも知れない。

造船学科を専攻する学校は、幕末に始まるが、その沿革をちょっと、『明治工業史造船篇』に頼ってみよう。

慶応三年(一八六七)五月、幕府の横須賀造船所首長のフランス人ヴェールの発議により、造船所内に設立された横須賀鑿舎が、その始まりである。鑿舎は、明治維新で一時間閉鎖されたが、明治三年(一八七〇)復興され、海軍技官の養成に当った。その後、鑿舎の組織は変更され、技官の養成は、同十七年(一八八四)五月、東京大工科大学に依託され、理学部付属の造船学科が設置されることとなった。

一方、工部省所管の工部大工学校機械科に於て、明治十三年(一八八〇)、造船学の授業を開始している。その修業年限は六カ年。うち二年を予科、四年を本科に分け、本科一カ年を機械学、三カ年を造船学の授業に充て、三カ年とも、講議のほか、一定期間とも、各造船

クロテンコオトギリ (おとぎりそう科)

Hypericum hakonense forma imperforatum Y.Kimura



筆者原図

クロテンコオトギリ(黒点小第切)はオトギリソウ(第切草)の仲間である。

オトギリソウについては、昔ある鷹匠がこの草を鷹の傷を治す家伝の秘薬として

オトギリソウは全国に分布するが、よく似ている類

縁の種類が多く、その分類はたいへんむずかしい。しかし、おとぎりそう科として共通の特徴がはっきりしている、ある植物がおとぎりそう科であるかどうかは少し慣れればすぐわ

丹沢の植物

②1

城川四郎

所に配属し、実地研修をさせている。明治十六年五月になると造船科は、分離独立して、一科となった。そして、明治十九年(一六六)になると、工部大学校と東京大学理学部とは合同して帝国大学工科大学造船

学科として発足した。この学制改革を断行したのは森有礼である。森は、明治十八年十二月二十二日、維新以来の太政官制度が廃され内閣制度が採用されると、初代文部大臣に就任した。三宅雪嶺は、森を『同時

代史』で次のように述べている。森は特殊の人物として早く知られ、新内閣にも最年少たるを以て、必ず注目すべきあらんと待設けられ、果して教育の全制度に改革を加へ、……新たに世に出んとする青

年の方向に影響し、之に最も強き刺戟を与えたり。目良恒も強い刺戟を受けた一人なのであろうが、ここでちょっと付け加えて置きたいのは、両校の合併に当って、工科大学校の学生や卒業生がそれを承知しな

いで、学生の反対運動が活発に行われた事である。綱

かものものである。その特徴の一つは、葉を透かして見ると腺点が見えることである。この腺点は種類によって、黒点、赤点、明点など色の違いがある。赤い点は、それが弟を切ったときの血しぶきと、想像をめぐらせるきっかけになったのかもしれない。

オトギリソウに比べて、小さく、葉も細く、葉の腺点が明点である種類が箱根に分布する。これをコオトギリ(ハコネオトギリ)という。そのコオトギリに他の特徴は一致するが、腺点が黒点だけで明点を含まないという種類が丹沢を中心に分布することがわかっている。これをクロテンコオトギリという。川原や崩壊地に生え、夏に黄色い花を咲かせる。コオトギリとは微妙な違いで、ルーペを使わないと区別できないが、丹沢の特徴的な植物の一つに挙げられている。オトギリソウが鷹の傷薬として効くかどうか確認していないが、タンニンを含み、漢方では止血剤として用いられる。

古文書講座 9

中村原の善次郎の水車

内田 清

関東の先駆か早川の水車

今回から数回は江戸時代の商工業文書を紹介します。

水のエネルギーを活用する水車

(くるま)の歴史は、意外に短いものです。飯泉観音の実応和尚が一八四四年に書かれた『飯泉志稿』では、播磨の人宮原直三郎が、一七七二年、早川村に設けた「油絞り水車」が東国での水車の始まりです。

しかしこれは一七六七年に、関東の綿実を早川村に集めて多田屋直三郎らに灯油を絞らせる御触書が出ているので、五年以上遡るのが史実でしょう。

水車は煎った綿実を粉碎する工程を担当し、人力の踏臼より格段に効率を上げました。『飯泉志稿』は早川の水車が両三年で中村原村・今泉村に移転し、ここで精米用に改造されたとしています。

西相模最初の水車は

中村原と秦野市今泉を調査すると、

水車は有りましたが設置年代が不明でした『二宮町史』からヒントを得て志沢選家を訪ねると、図版の史料

を含む一七六三年の四点を初めてした約二十点の水車文書がありました。これ

で東国の水車の歴史は、また四年遡った訳です。

しかし幕府の記録では一七三二年に將軍吉宗が江戸淀橋の製粉水車を訪ねています。関東の水車史は元禄期からの説も有ります。

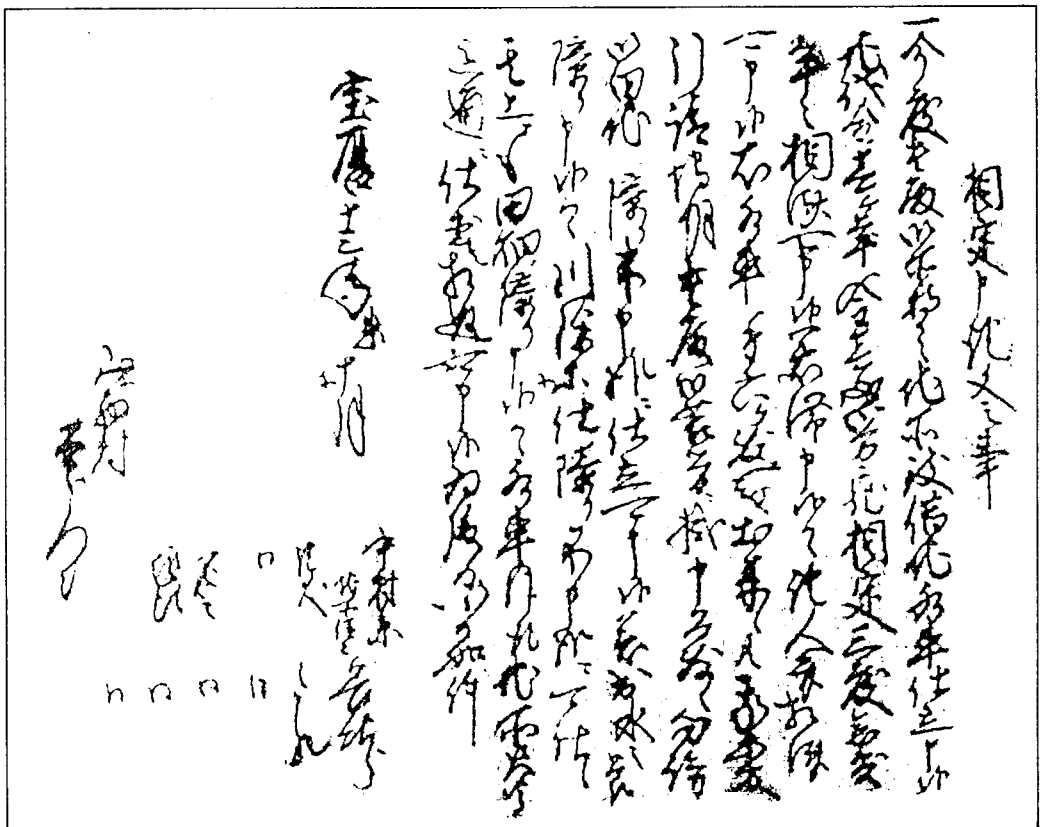
とはいえ、私の調べでは幕府領中村原村善次郎の水車が西相模最初の水車です。

善次郎の水車証文

志沢家文書で経過をみると、宝曆十三年善次郎から新設水車の用地として中村川沿の荒地の畑七畝余の借地を申し込まれた、川越藩領山西村の太郎右衛門は、八月、田畑や治水に迷惑を掛けないと言う条件で、五人組・村役人の同意を得て役所に出願し、貸付けの許可を受けました。

そして十月、車主善次郎は、水車用地借用の証文(図版は無印なので写しです)を地主の太郎右衛門に出し、年三回の地代金納入や証人としての保証、洪水対策、水車引取(取払い)事項等を約定したわけです。

善次郎の水車は「油絞り水車」導入の条件が有ったことを示しています。が残念なことに、製油との関係は不明です。一八四四年の文書では



一 夕 觀

北村透谷

其一

ある宵われ臆にあたりて横はる。
 ところは海の郷、秋高く天朗らかに
 して、よろづの象(現象)、よろづ
 の物、凜乎(りりしく)として我に
 迫る。恰も我が眞率(ひたむき)な
 らざるを笑ふに似たり。恰も我が
 局促(心の小さいさま)たるを嘲るに
 似たり。恰も我が力なく能なく辯な
 く氣なきを罵るに似たり。渠(きよ)は
 大きくて広い)は斯の如く我に徹透
 す、而して我は地上の一微物、渠に
 悟達することの甚はだ難きは如何ぞ
 や。

仰いで蒼穹(青空)を觀れば、無數
 の星宿(星座)紛糾(いりみだれ)し
 て我が頭にあり。顧みて我が五尺
 (体)を視、更に又内觀して我が内
 なるものを察するに、彼と我との距
 離甚だ遠きに驚ろく。不死不朽、彼
 と與にあり、衰老病死、我と與にあ
 り。鮮美透涼なる(あざやかに美しく
 すきとおる)彼に對して、撓み易く
 折れ易き我れ如何に赧然(恥じて赤
 面する)たるべきぞ。爰に於て、我
 は一種の悲慨(悲しみなげく)に撃
 たれたるが如き心地す。聖にして熱
 ある悲慨、我が心頭に入れり。罵者
 (ののしる者)の聲耳邊にあるが如し、
 我が爲すなきと、我が言ふなきと、
 我が行くなきとを責む。われ起つて
 茅舎(あばらや)を出で、且つ仰ぎ
 且つ俯して罵者に答ふところあら
 んと欲す。胸中の苦悶未だ全く解け
 ず、行く行く秋草の深き所に到れば、
 忽ち聴く蟲聲樓の如く(絶えまなく)
 耳朶(耳)を穿つを。之を聴いて我

心は一轉せり、再び之を聽いて悶心
 更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは
 苦悶にあらざりけり。看よ、唧々
 (かすかな声)として秋を悲しむが如
 きもの、彼に於て何の悲しみかあら
 む。彼を悲しむと看取せんか、我も
 亦た悲しめるなり。彼を吟哦(歌う)
 すと思はんか、我も亦た吟哦してあ
 るなり。心境一轉すれば彼も無く、
 我も無し、邈焉たる(はるかなる)
 大空の百千の提燈を掲げ出せるある
 のみ。

其二

われは歩いて水際に下れり。浪白
 ろく萬古の響を傳へ、水蒼々として
 永遠の色を宿せり。手を拱ねきて蒼
 穹を察すれば、我れ「我」を遺れて、
 飄然(ひらり軽いきま)として、襜褕
 (ぼろの着物)の如き「時」を脱する
 に似たり。

茫茫乎たる空際は歴史の醇(淳・
 純に通ず)の醇なるもの、ホーマー
 ありし時、プレトリーありし時、彼の

北斗(名聲)は今と同じき光芒を放
 てり。同じく彼を燭らせり、同じく
 彼れを發らけり。然り、人間の歴史
 は多くの夢想家を載せたりと雖、天
 涯(宇宙)の歴史は太初(天地開闢の
 前)より今日に至るまで、大なる現
 實として残り。人間は之を幽奥と
 して畏るゝと雖、大なる現實は始め
 より終りまで現實として残り。人
 間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱

へて、之を以て調和す可かわざる原
 素の如く諍へる間に、天地の幽奥
 (くらく深い)は依然として大なる現
 實として残り。

其三

われは自から問ひ、自から答へて
 安らかなる心を以て蓬窓(いぶせき
 住家)に反れり。わが視たる群星は
 未だ念頭を去らず、靜かに燈を剪つ
 て書を讀まんとするに、我が心はな
 ほ彼にあり。我が讀まんとする書は
 彼にあり。漠々たる大空は思想の廣
 ろき歴史の紙に似たり。彼處にホー
 マーあり、シエークスピアあり、
 彗星の天系を亂して行くは、パイロン、
 ボルテリアの徒、流星の飛び且つ消
 ゆるは泛々たる(浮びさまよう)文
 壇の小星、吁、悠々たる天地、限な
 く窮りなき天地、大なる歴史の一枚
 是に對して暫らく茫然たり。

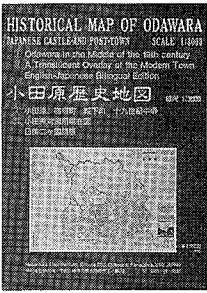
島崎藤村の解説

『萬づの象、萬づの物、凜乎として我
 に迫る』とはいかにも詩人としての彼の
 面目をよく語つてある。彼は何事にもこ
 の透徹と悟達とを期した。彼は自身にも
 言つて居るやうに、物に感ずることが深
 くて悲みに沈むことも尋常でなかつた。
 又、美しいものに意を傾けることも人に
 過ぎて多かつた。けれども彼が物に感じ、
 美しいものに意を傾けるといふは、物を
 通じ形を鑿ちてその心髓に徹しなければ



「透谷庵に寄す」

わが影や われにあたへん
 飛ぶこてふ(胡蝶) 前号訂正



①小田原 宿場町・城下
町十九世紀中頃
②小田原対照現在図
編集 中村地図研究所

新刊紹介

◇小田原歴史地図

『評論』(女学雑誌社)に発表された。
註1 海の郷 前川村(小田原市前川)
を指す。「夕観」は、前川村の長泉寺
で執筆したもので、明治二十六年十一月
作家。

(藤村編『北村透谷集』)

休むことを知らないやうな熱意から来て居た。彼は俗韻俗調の詩人が徒らに自然の美を遊ぶことを憎んだが、その彼自身は、自然の美に動かされることの少いのを自ら怪しむほどの多感な詩人であった。彼が生命の内部に突き入らう入らうとして審美上の詮索にのみ満足せず、道徳の創造性にまで考察を向けた熱心には驚かれる。『生命のないところに信仰はない、信仰のないところに道徳はない。』と彼は言っている。この内観が主観的な冥想に堕ちて行ったのは彼としては止むを得なかったことだらう。

発行 中村 静夫
〒250小田原市江ノ浦三
☎〇四六五(29)〇五四七 価 一五〇〇円
販売所 小田原城天守閣
伊勢治書店 八小堂書店
平井書店
初版は二十年前発行されたが、前回同様、城郭、神社、仏閣、藩士宅、本陣、脇本陣、旅籠、商家などが示されているが、その内容は一段と充実したものとなっている。また、問屋場や船大工、鋳物師など新たに判

なお、透谷が長泉寺(先祖の菩提寺)本堂隣りの一室を借りたのは、明治二十六年(六三)八月三十日で、秋頃には東京に戻った。
註2 ホーマー(ホメロス)生没年不詳。古代ギリシアの二大叙事詩『イリアス』『オデュッセ』の作者といわれる。
註3 プレート(プラトン)紀元前四七〇年。古代ギリシアの哲学者
註4 シエクスピア(二五〇)イギリスの詩人、劇作家。
註5 バイロン(一七八八)イギリス・ロマン派の代表的詩人。
註6 ボルテア(ボルテール)云々(七六) フランスの啓蒙思想家、作家。

◇時空

明した十数カ所が追加記入されている。
なお、付録としてB2判の「東海道五十三次繁昌記」と題した宿場町の番付表が添えられていて、小田原宿は、東の横綱として登場している。

発行 鈴木一正
〒233横浜市港南区日野一丁目一九〇四
A5 五三頁五〇〇円
二二〇円

小説▽イズマイロボの月 椎名真珠子
人物論▽戦無派の昭和史 近衛文麿(3) 菊田 均
研究▽柄谷行人著作目録 昭和四十一〜平成五年 鈴木 一正
椎名真珠子氏「イズマイロボの月」は、第二号の「社務所の女」に続く第二弾で息子の死という事件を、

◇随筆 禅のみち

今回は全く別の観点から扱っている。
菊田均氏「戦無派の昭和史―近衛文麿(3)」は、連載の三回目。近衛文麿は一応今回で終るが、「戦後派の昭和史」シリーズは、今後も続く由。
鈴木一正氏「柄谷行人著作目録」は、前号の「柄谷行人参考文献目録」の姉妹篇。ともに旧稿を増補改訂したもの。柄谷行人の書誌は、今回で一応終え、次号から北村透谷の書誌に戻るとのこと。

郷土誌目次紹介

鈴木一正氏は本会々員であるが、小型ながら充実した内容の雑誌を発行されていることに敬意を表したい。

◇史談足柄

足柄史談会発行
〒250-01 南足柄市岩原四三四
岩本直明方
電話(045)74-0113

本書は、月刊『文芸広場』の誌上に「禅のみち」と題して連載されたもののほか、月刊『かながわ風土記』季刊『若間乃道』、成蹊大

第32集 94・4 A5 二八頁
。古代の足柄と足柄道
。大正十二年九月一日
関東大震災から七十年
笠間 吉高



。移動された石仏馬頭観世音

岩本 一作

。郷土の史跡歩きに参加して

渡辺 治美

。寺に嫁入りしたお姫さま

本多 次郎

。斑目村に伝わる河川・道路・地名

加藤七之助

。報徳堀について 調査報告

石村豊・杉田美代子

。四方山話しあれこれ

磯崎 藤子

。一幅の画からの波紋

大滝 正

。日本人と仏教発展へ 庶民宗教は山岳修業者より

小見山 満

特集「むらに伝わる話」

巴御前と和田河原

。仏像や石造物

渡辺 賢蔵

。千津島の観音さま

岩本 宣明

。小豆とぎとかんすころがし(狩野) 仏像や石造物

加藤カホル

。蚊ふうじの石(飯沢) 故生沼清治・小沢勇一

太刀洗川・一つ目小僧

(地藏堂)・金剛水(大雄山)・権現さんの御手洗

の水(三竹)

故生沼清治

落穂集

◎平成米騒動がまだ治まらぬ三月の初めの事である。

富山の友より、今年富山産が最高の品質であると伝えられた、コシヒカリを十kgほど送ってきてくれた。

追っ付け電話で、米の中にニンニクと硼酸が入れているが毒ではないので、よく洗って食べてくれ、と連絡がきた。ニンニクは、米のストッカーの裏蓋に乾燥した唐辛子を貼りつけるのと同じ役目、穀象虫がつかぬようにするためのものと、すぐ理解できたが、硼酸を入れてあるのは、よく判らなかつた。

いつも配達してくれる米屋のN君に聞いてみても、そんな習わしを聞くのは始めてだという。ただ、コシヒカリは軟質米なので暑さに向くと質が落ちるといふことを知ることが出来た。

経験豊かで探求心旺盛なAさんに話してみたら、硼酸は気化してガスになる。それが役するのではないかと。さらに、親戚先の菌

医者で薬理に詳しいFさんに尋ねてみると、カビ止めの役をするのではないかと

思うという返事だった。いずれにしても、硼酸が米の保存料とは、初耳だという。

「処変れば品変る」ではないが狭い日本の中でも「生活の知恵」のあり方に違いがあるのを改めて知らされた思いである。なお、富山の友の心遣いはうれしく、それに大いに助かったことはいふ迄もない。

◎小八幡の和田次郎氏のお骨折りで、故川邊昂氏が遺された私家本『川邊本家物語』が寄せられた。紙面の都合で次号以降に掲載されるが、酒匂の旧家川邊家は、明治末期から、小田原地方の漁業界に進出、相模湾で初めて鱒大謀網の張り立てをし、大成功を収めた。そして、一時鱒大尽と呼ばれる程に盛名をさせた。その記録は、一家を超えたものがあるに違いない。

◎小野意雄氏が「大久保忠良・徳大寺照子縁組覚書」の労作を寄せられた。今まで一般に知られていなかった資料を発掘駆使しての内容で、大久保忠良の人物像を浮かびあがらせるものとなつて

なっている。次号以降二回に分けて連載の予定。

◎紙面の都合で、連載中の「露国・日露の役浮虜のこと」、「古墳遍歴」、「歴史詠みこみ川柳」は、次号に掲載することになった。

会員消息

◎「関東大震災の雑想」を記された、曾我谷津の市川一郎さんは、明治三十五年一月六日生れで、満九十二歳。届けていただいた原稿はその図表と共にワープロで打ち込み。おそらく息子さんかお孫さんによつてもらつたかと思つていたら、ご自身でなさるといふ。「年をとると、誤字、脱字が多くなるがワープロを使うと、それが防げますので」といわれる市川さんがワープロを操作するようになったのは、八十歳の後半からとのこと。市川さんは現職のときは、「関東大震災の雑想」に記されているように、ワープロ操作と縁のある仕事ではない。ただ、脱帽あるのみ。

計報
山岸 忠三氏
(平塚市竜ヶ丘三一六)
去る六月二十四日逝去されました。享年七十八歳
ご冥福をお祈りします。

わけ曾我の歴史を、深く突っ込んで調べられている。去る七月二日の千代台史跡めぐりに、折からの炎天下に拘わらず、しっかりと足どりで参加されている姿をみて、市川さんにあやかりたいもの、という感じを深くした。

◎川崎司さんは、このほど、透谷没後百年記念出版『透谷と近代日本』(北村透谷研究会 樋谷秀昭・平岡敏夫・佐藤泰止編 翰林書房刊 価四八〇〇円)の「透谷年譜」をまとめあげられた。精査された内容で充たされ、文字通りの労作で、資料的価値が高い。

◎佐々木康平さん、故込山和勇さんの遺志を継がれ、北条遺跡顕彰会世話人として、去る七月十一日の北条氏政・氏照の命日に、小田原駅前おしゃれ横丁の一隅にある墓所で、墓前祭を

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 熱海 アオキクリニック
 足柄香粧株式会社
 飛鳥 魚屋
 紳士服の アメリカヤ
 (株) アルファ
 画材 ガクブチ ろうえ
 伊勢治書店
 ●伊豆箱根トラベル 小田原駅前
 ●かまぼこ
 南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
 税理士 小澤重治事務所
 公認会計士
 株式会社 小田原魚市場
 ●小田原ガス
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 株式会社 オートセンター・スギヤマ
 ●(共)小田原中央青果 株式会社
 オリオン座
 かまぼこ籠
 令 学 苑
 鐘紡株式会社小田原工場
 カネボウ化粧品鴨宮工場
 株式会社 神尾食品工業
 株式会社 木地挽 日下部産業
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 伊勢屋
 (有)小松石材店
 さがみ信用金庫
 趣味のごふく さくらい
 宝飾専門店 Shimano

正 堂 玉
 中華料理 昇
 杉山水道工業 齋
 杉 廣 木まほこ
 辰 寿堂 スポーツ
 大 営 不 動 産
 割烹 おる 海
 二 宮
 茶半家具株式会社
 ちんぎょう本店
 土谷建設株式会社
 角田ガクブチ店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東 華 軒
 トーホー建物 齋
 和菓子 菜の 花店
 八小堂 書 店
 八 子 マ サ 店
 平 井 書 店
 富士写真フイルム 齋小田原工場
 株式会社 報 徳
 * 町 松 坂 屋
 学生専科 ●丸 マルク
 食器の店 マルサンストア
 みつゆき設計
 諸星運輸グループ
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所
 防災器具 優 光 社

施。小田原市長や、県・市議、それに、自治会、商店街の方々ほか多数の方が列席。なお、非常によい事なのでと、宝安寺望月正道師が本年初めて出席された。なお、小田原史談会では、富田千春、岡部忠夫の両名が出席。

迄、アオキ画廊に於て開催。今回は俳句を染めた色紙をも展示、和歌は昔より染められてきたが、俳句は珍しい由。◎東京都下の鈴木富美子さん、振替口座の通信欄に次のようなメッセージ。「一五七号会報を早速にみせていただき、お名前の存じあげて居ります方々のこと、なつかしく読ませていただきました。内容の充実した編集に皆様方の努力がうか

がえます。ありがとうございます。励ましとねぎざいいます。らいのお言葉ありがとうございます。

小田原史談会諸行事等

千代台 平成六年七月二日(出) 史跡めぐり
 時々五時現地集合解散「講師」富田千春「コース」千葉山蓮華寺―千代廃寺―南原―鐘堀田―弥生時代遺跡―長立寺跡―円宗寺―観音屋敷跡―千代公民館

「参加者」(順不同敬称略)
 富田千春、小田中正二、田島連江、石井艶子、角田道・幸子、向山重忠、大河原安、杉山竹二、高田稔、佐々木正孝、譲原良二、三尋木啓子、小室泰子、飯田悟郎、富田みよ子、大場千代子、杉山正善、市川二郎、三笠清治・道江、保田徳

子、和田治助、山口新平、時田満子、杉浦恵一、相原俊夫・佐和子、佐々木康平、星野廣司、曾我保夫、原正、松本巽、柳川辰夫、内田美枝子、力石郷水、金子正夫、湯川玲子、横沢正美、石綿勉、勝俣末子、石川タカ子、杉山久江、林清美、小林房子、小西マツ、内田公子、伊藤碧恵、安藤繁美、竹内生子、難波明、岡部忠夫、吉川保、高橋佐年、本多芳雄、木曾正雄、片山輝男・敏子、富田きみ江、田口鏡子 以上六十名

年会費 普通会員三千円
 〇〇二〇一三六四三三六